はじめに

４月、１年生が４名入部したことで全ての学年が揃い、部員が１０名を超す状態で２０１５年度は始まりました。この部員数はここ数年では、最も多い人数であり、まさに山岳部の「復活」を感じさせる体制でした。しかし、人数こそ揃っているものの学年によって、特に上級生間の経験、実力に大きな差があることが昨年度より課題として残っていました。さらに今年度で３人が卒業することにより、来年度は大きなパワーダウンが予想されることも新たな課題として浮き彫りになりました。

そうした中で、今年度に最も必要なことを熟考した結果、この１年間は部員の足並みを揃えること、つまり実力の底上げに主眼を置くべきと判断しました。その背景を踏まえて、今年度の年度目標に「積雪期縦走形式での合宿」というものを加えました。積雪期の縦走を目指す、実施することで、その目的を達成できると考えたからです。そのため、今年度の活動は基礎能力を引き上げることを目的とした合宿を多く実施しました。夏山合宿では、久しく計画できなかったハシゴ谷から入山し、下山は島々まで行くという行程を組みました。秋山合宿では北アルプスの縦走、春山強化合宿では縦走して入山することにしました。その一貫性を保つことができたことが、春山合宿での年度目標達成に繋がったのだと思います。

これは、学生だけでここまで到達することは不可能であったと思います。監督、コーチをはじめ、多くのＯＢ・ＯＧの皆様のご指導ご鞭撻があってこそ達成できたのだと思います。その感謝の意を込め、２０１５年度の活動記録をＮＡＶ報告としてご報告致します。

主将　小野寺央峻

目次

１．新人歓迎合宿（２０１５年４月３０日～５月２日）・・・・・・・・・・・・・・・２
２．岩登り合宿（５月１６日～５月１８日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
３．六月合宿（６月１９日～６月２４日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
４．夏山合宿（８月３日～８月２１日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
５．秋山合宿（１０月２日～１０月６日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
６．耐寒合宿（１１月２１日～１１月２３日　１２月４日～１２月７日）・・・・３２
７．冬山合宿（１２月２５日～１２月３０日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
８．春山強化合宿（２０１６年２月５日～２月１１日）・・・・・・・・・・・・・４８
９．春山合宿（３月４日～３月１１日）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
１０．個人山行 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８
１１．部員所感 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９

１．新人歓迎合宿

期　間：２０１５年４月３０日～５月２日

場　所：上越　巻機山

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
４年　岩附正樹
３年　大山洋平
２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
１年　小島明　志村康介　橋本允聖　三宅亜理
ＯＢ　宮崎紘一　辻田代史雄　豊島義明　村田岳　長久保浩司　吉田裕一
小和田和貞　安済共　福留邦晃　高野優　西出広平　渡邊葉月

行動概要　：　４月３０日　離京　入山　清水バス停～巻機山麓キャンプ場（ＢＣ）
５月　１日　ＢＣ～雪上訓練～巻機山頂上～ＢＣ
５月　２日　ＢＣ～雪上訓練～ＢＣ

４月３０日　快晴
清水バス停（１３：４０）～巻機山麓キャンプ場（ＢＣ）（１３：５５）
前日は部員の家に泊まり、早朝に経堂を出発して電車とバスを乗り継いで清水バス停まで行く。日差しが非常に強く気温が高いなか、清水バス停を出発する。九十九折りの舗装路を１０分程歩き、作業小屋近くから林道に入りキャンプ場に行く。そこから５分程で巻機山麓キャンプ場に到着する。キャンプ場の雪の量は去年よりやや多かった。スコップとピッケルで整地をして、ＢＣを設営する。

５月１日　快晴　７℃
ＢＣ（７：１５）～六合目付近（８：１５）～前巻機山（１２：００）
～巻機山頂上（１２：５０）～ＢＣ（１４：２０）
穏やかな晴天の下、元気よくＢＣを出発する。大山は朝から３８℃の熱があったためこの日はテントキーパーとする。桜坂駐車場までは林道を行くが、林道は例年よりも雪に埋まっている。林道を少し行くと井戸尾根に差し掛かる。夏道は雪が解けており、ぬかるんでいるため滑らないように注意しながら進む。井戸の壁の急登ではキックステップをしながら慎重に登る。井戸の壁を抜けて五合目にて少し休憩し、そこから六合目まで全力で登る。ここからは急登はなくスムーズに進む。六合目に着いた後、雪上歩行訓練を開始する。

上級生の指導の下、雪面での歩き方を一通り確認する。フォームを意識して何度も訓練する。その後雨具を着て滑落停止訓練を始める。１年生はピッケルが体から離れたり、足が着いたりと最初は苦戦していたが、最後にはしっかり決めることができた。訓練終了後、前巻機山まで声を掛け合いながら全力で登る。樹林帯を抜け、雪原が広がると、皆前を行く者に追いつこうと必死に登る。前巻機山までの最後の急登は、夏道が出ていたため快調に登っていける。緩い傾斜の稜上を少し歩いて前巻機山にて休憩を取る。前巻機山からくっきりと巻機山の山頂が見えた。休憩後、山頂手前の避難小屋まで一気に駆け下り、コルから最後の登りを競争しながら全力で進む。山頂に立つと無風快晴であり、天候も１年生を歓迎しているように思えた。山頂にて記念写真を撮り、ＯＢの方から差し入れを頂く。その後来た道を全力で駆け下る。足が雪に取られてスリップすることもあったが皆全力で走った。井戸の壁は上級生が下に着いて慎重に下りＢＣに帰幕した。１５時頃に村田ＯＢ、宮崎ＯＢが入山される。夜はバーベキューをして談笑しながら１年生の入部を祝った。また２０時頃に福留ＯＢが入山された。

５月２日　晴　７℃

ＢＣ（７：２０）～井戸の壁（８：２０）～六合目付近（８：５０）

～ＢＣ（１０：４５）

昨日と変わらず朝からよく晴れている。六合目付近まで昨日と同じように進み、昨日の復習を兼ねて雪上歩行訓練と滑落停止訓練をする。二日目という事もあり１年生も慣れた様子でしっかり訓練していた。訓練終了後ＢＣまで駆け下る。井戸の壁の急坂は危険なため慎重に下り、そこから再び全力で駆け下った。全員が帰幕した後、整理体操を行い、新人歓迎合宿を終える。

左上段から　小野寺　岩附　井上　中村　左下段から　志村　三宅　小島　橋本

２．岩登り合宿

期　間：２０１５年5月１６日～5月１８日

場　所：御坂　三ツ峠

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
　　４年　岩附正樹
　　３年　大山洋平
　　２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
　　１年　小島明　志村康介　橋本允聖
　　ＯＢ　村田岳　小和田和貞　安済共　西出広平

行動概要　：　5月１６日　離京　入山　三つ峠駅～達磨石～表登山道
　　～屏風岩付近（ＢＣ）～屏風岩登攀～ＢＣ
　　１７日　ＢＣ～屏風岩登攀～天狗の踊り場～ＢＣ　（井上下山）
　　１８日　ＢＣ～屏風岩登攀～表登山道～三ツ峠グリーンセンター　下山

5月１６日　曇
三つ峠駅（７：１０）～達磨石（８：１０）～馬返し（９：４０）
～屏風岩付近（ＢＣ）（１１：１０）～屏風岩（１２：１０）～ＢＣ（１７：００）
曇っていて雨が降りそうなため雨具を着て三つ峠駅を出発する。達磨石までは緩やかなアスファルトの舗装路を進んでいく。達磨石に着く少し前に雨が降るがすぐに止む。ここから先は登山道となり、１年生のペースにもばらつきが出始めるが、懸命に付いてくる。馬返しの辺りで空が明るくなってきたため、雨具を脱ぎ、屏風岩付近まで一気に登る。屏風岩付近にＢＣ設営後すぐに屏風岩で登攀を開始する。一般ルート左と中央にトップロープを張り、２年生のリードとトップロープで、一般ルートとリーダーピッチを登り込む。初めてのリードで緊張するが、安定して登ることができた。１年生は支点構築やビレイの仕方をしっかりと確認しながら登攀した。最初は時間が掛かっていたが、足の置き方を覚えていくうちに次第にスムーズに登れるようになっていた。一通り登った後、カムディバイス、ナッツの使い方の講習をしてＢＣに帰幕した。この日の１３時頃に小和田ＯＢ、安済監督、西出ＯＢが入山された。

５月１７日　晴　９℃

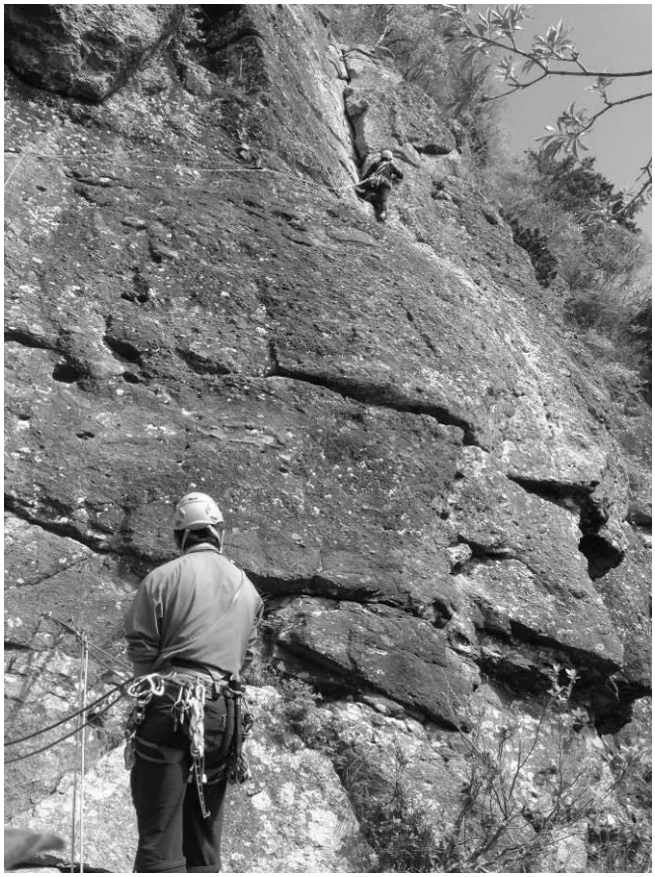
ＢＣ（６：００）～屏風岩（６：１０）～ＢＣ（１２：００）
～天狗の踊り場（１６：３０）～ＢＣ（１８：００）

明け方に小和田ＯＢが下山される。朝から天気が良く登攀日和である。屏風岩に到着すると、早朝にも関わらず２、３パーティ取り付いている。午前中は４パーティに分かれて一般ルートとリーダーピッチにトップロープを張り登り込む。２時間程登り込んだところで、２、３年生はリーダーピッチ、地蔵ルート左、草溝ルートのリードをする。１０時頃に村田ＯＢが入山された。昼食は一旦ＢＣに戻り、焼うどんを食べる。昼食後に安済監督が下山される。午後からは岩附＝志村＝村田ＯＢパーティ、大山＝橋本＝西出ＯＢパーティ、中村＝小島＝小野寺パーティ、井上＝関根パーティに分かれて頂上を目指す。岩附＝志村＝村田ＯＢパーティは一般ルート右からサンドイッチ、大山＝橋本＝西出ＯＢパーティはリーダーピッチからサンドイッチ、中村＝小島＝小野寺パーティは一般ルート左からＮｏ．１０．５クラック、井上＝関根パーティは地蔵ルート左から第一クラックを登攀する。その後Ⅱ～Ⅲ級の岩場を登り天狗の踊り場へ向かう。井上＝関根パーティは関根が第一クラックのリードでグランドフォールし、腰を痛めたため懸垂下降しＢＣで待機する。残りの３パーティは無事に天狗の踊り場まで到着して記念写真を撮り、ＢＣへ帰幕する。１７時に井上が授業の関係で早下山した。

５月１８日　曇　９℃

ＢＣ（７：００）～屏風岩（７：２０）～ＢＣ（１３：４０）～達磨石（１５：０５）
～三ツ峠グリーンセンター（１５：３０）

今日も元気よく体操した後、屏風岩に向かう。屏風岩は平日ということもあってか、非常に空いていた。各パーティに分かれて一般ルート左、中央、リーダーピッチに取り付く。昨日までの登攀を復習しながらしっかりと登り、上級生、１年生共に落ちずに登ることができた。その後上級生は草溝ルート、観音ルートなどでリードの練習をする。一通り登り込んだ後、リーダーピッチにて肩がらみ懸垂の講習会をする。１年生は痛みに耐えながら懸垂下降していた。全員が懸垂下降を終えた後、ハーケンの打ち方、ジャンピングを使用したリングボルトの打ち方を上級生から教わる。講習終了後、すぐにＢＣを撤収する。急いで荷物をザックに詰め込み、三ツ峠グリーンセンターまで全力で駆け下る。途中で転倒や、重荷で足が前に進まないこともあったが、皆最後の力を振り絞って走り切った。三ツ峠グリーンセンター前で整理体操をして岩登り合宿を終える



草溝ルートを登る中村、ビレイは小野寺

天狗の踊り場にて　左から　小島　大山　橋本　小野寺　志村　岩附　中村

３．六月合宿

期　間：２０１５年6月１９日～6月２４日

場　所：北アルプス　涸沢

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
４年　岩附正樹
３年　大山洋平
２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
１年　小島明　志村康介　橋本允聖
ＯＢ　深谷茂　中洞拓人　高野優　西出広平　渡邊葉月

行動概要：６月１９日　入山　上高地～涸沢（ＢＣ）
２０日　ＢＣ～雪上訓練～ＢＣ
２１日　ＢＣ～北穂高岳東稜～北穂高岳～東稜のコル～ＢＣ　（中村下山）
２２日　ＢＣ～前穂高岳北尾根～前穂高岳～奥穂高岳～白出のコル～ＢＣ
（大山、橋本下山）
２３日　ＢＣ～東稜のコル～北穂高岳～白出のコル～ＢＣ
ＢＣ～北穂高岳南峰～滝谷（ドーム中央稜）～白出のコル～ＢＣ
（岩附下山）
２４日　涸沢～横尾～徳沢～明神　下山

６月１９日　雨
上高地（７：１５）～明神（７：５０）～徳沢（８：４５）～横尾（９：４５）
～本谷橋（１１：００）～涸沢（ＢＣ）（１３：２０）

新島々から始発のバスに乗り上高地へ向かう。上高地では雨が降っていたため雨具を着て出発する。梓川を左に見ながら平坦な林道をひたすら進んでいき、明神で着替えをデポする。雨は徳沢に着く頃には一段と激しくなっていたが、横尾ではかすかに降っている程度であった。横尾大橋を渡って砂利道を少し行くと、所々傾斜がきつく木の根が張り出した道となる。本谷橋までは例年残雪で道が一部埋まっているが、今年は時期が遅いため夏道が出ていた。本谷橋からは本格的な登山道となる。途中から雪が現われるようになりオーバー手袋とスパッツを着ける。この辺りで再び雨が強くなった。樹林帯の斜面をトラバースして進み、ひたすら夏道を行く。所々、残雪に覆われた斜面を渡って歩く。涸沢ヒュッテ直下の雪渓に突き当たり、直登して涸沢ヒュッテを目指す。雪質は軟らかかったが１

年生は初めての重荷での雪渓登りで、足を滑らせて思うように進めなかった。長時間の行動で苦労しながらも、最後まで全力で登り切った。夏に向けての小屋の掘り出し工事が始まっていたため、例年とは違い涸沢ヒュッテのすぐ隣の雪面にＢＣを設営し、この日の行動を終える。先に入山されていた深谷ＯＢが出迎えて下さり、差し入れのさくらんぼを皆で頂いた。

６月２０日　晴のち曇　４℃

ＢＣ（７：００）～Ｖ・Ⅵのコル下部（７：３０）～Ｖ・Ⅵのコル直下（１２：５０）～ＢＣ（１３：１５）

Ｖ・Ⅵのコルの雪渓を登り、急坂に差し掛かった所で雪上訓練を開始する。上級生と中洞ＯＢの指導の下で雪上歩行訓練、滑落停止訓練をする。１年生は涸沢の急斜面に苦戦しながらも懸命に取り組む。次にハーネスを装着してスタカット、コンティニュアスの訓練をする。スタンディングアックスビレイに加えて、シッティングビレイでの確保訓練も行う。スノーバーやピッケルで雪面に支点を取る手順を学び、滑落した相手をすぐに止められるように何度も繰り返し実践する。一通り止められるようになった後は、Ｖ・Ⅵのコル直下までコンティニュアスの訓練をしながら登る。徐々に天候が悪くなり、途中でにわか雨が降った。Ｖ・Ⅵのコルの直下に着いた所で雪上訓練を終了する。ＢＣまで駆け下り、この日の行動を終了する。

６月２１日　雨　３℃

ＢＣ（７：０５）～北穂沢カール（８：００）～ゴジラの背の取り付き（８：５５）～東稜のコル（１０：３０）～ＢＣ（１２：３０）

朝から雨が降り出したので朝食後３０分天気待ちをして出発する。雪渓を登る途中で夏道に移り、北穂沢カールまで進む。北穂沢カールからは東稜の最低コルの急な雪渓を進む。傾斜がきつく雨で雪が軟らかいため滑りやすく、上級生が１年生の下に付き慎重に登っていく。最低コルからは、稜上の岩場を小岩峰に向かって登り、すぐに横尾谷側の雪渓を進む。横尾谷側の雪渓が切れると涸沢側に向かって稜上に出る。再びガレた道を少し進みゴジラの背の取り付きに着く。安定した場所で登攀具を付け、関根が１ピッチ５０ｍのＦｉｘを張る。途中支点はピナクルやハーケンで取る。ゴジラの背を通過する際は、横尾谷側の踏み跡を進み、途中で涸沢側に移る。そしてスタンスがしっかりとした大岩を乗越して横尾谷側に再び戻る。そこからトラバース気味に進んで再び涸沢がわに乗越す。さらに稜上を進むと両サイドが大きく切れ落ちている。ここでピナクルとハイマツに終了点を取る。続いて大山がセカンドでＦｉｘの固定をする。その後上級生が１年生の後に付いて慎重に進む。雨で足場が濡れており、少し怖く感じた。回収は井上が行った。ピナクルに７ｍの捨て縄を巻いて支点を取り、東稜のコルまで横尾谷側に懸垂下降する。途中大きな浮石があるため落とさないように慎重に下降した。この時点で非常に大粒の激しい雨が降り、視

界も不良であったため計画を中止し、東稜のコルから下ることにする。コルからの雪渓は傾斜がきつくクレバスがある可能性もあったため、大山が先行して２０ｍＦｉｘを張る。支点はスノーバーで取った。Ｆｉｘ箇所を過ぎてからは北穂沢カールまで一気に駆け下る。急傾斜での駆け下りに１年生は少し苦戦していた。夏道を下り、帰幕すると西出ＯＢと渡邊ＯＧが入山されており、ＢＣで出迎えて下さった。皆で体操した後、中村は中洞ＯＢと渡邊ＯＧと共に下山した。

６月２２日　晴　３℃

＊前穂高岳北尾根

井上（２）＝小島（１）＝小野寺（４）　岩附（４）＝志村（１）

関根（２）＝西出（ＯＢ）

ＢＣ（６：００）～Ⅴ・Ⅵのコル（６：５０）～Ⅲ峰頂上（１１：２０）

～前穂高岳山頂（１２：００）～白出のコル（１４：３０）～ＢＣ（１５：００）

夜の間はぐずついていた天気も明け方には回復していた。ＢＣを出発しⅤ・Ⅵのコルへと向かう。コルまでの雪渓は溶けかけていてそれほど硬くはない。Ⅴ・Ⅵのコルにてスパッツ、オーバー手袋を外し、登攀具を着けⅤ峰へ向かう。Ⅴ峰への道は踏み跡がはっきりしている。涸沢側からリッジを忠実に登り、Ⅴ峰頂上の少し手前は奥又白側から巻くように登る。Ⅴ峰からⅣ・Ⅴのコルまでは緩やかな道が続くが、コルの手前は涸沢側に切れ落ちているため注意する。Ⅳ峰へは、涸沢側から不明瞭な踏み跡を辿りリッジへ上がる。岩が少し湿っており滑りやすいため慎重に登る。Ⅳ峰頂上の手前にある顕著なピナクルの下から奥又白側に続くバンドを進み、再び涸沢側に折り返すように登るとⅣ峰頂上へ着く。そこからザレた道を下るとⅢ・Ⅳのコルに着く。コルから少し上がった所の残置スリングが掛かっている支点から各パーティに分かれる。先行は井上パーティ、次に岩附パーティ、関根パーティの順で登攀する。

１ピッチ目　大岩を乗越し、凹角を越えて奥又白側をトラバース気味に２５ｍ左上する。あまり直上せずに、奥又白側を巻くように進むと難しくない。岩壁から、ガレ場を少し登った所にある狭いテラスでピッチを切る。支点は残置ハーケンとカムで取る。

２ピッチ目　涸沢側に一段上がり、奥又白側の凹角を登る。支点は豊富に取ることができる。最後に大岩を乗越し、広いテラスの岩にスリングを掛けて支点を取り４０ｍでピッチを切る。

３ピッチ目　凹角を５ｍ程登り、浮石の多い緩やかなガレ場を４０ｍ程登る。凹角手前で残置ハーケンとカムで支点を取りピッチを切る。

４ピッチ目　幅の広い緩傾斜の凹角を登り、登り切った所から奥又白側にある大岩を乗越し、Ⅲ峰頂上へ到着する。ピナクルで支点を取り２０ｍ程でピッチを切る。ここで登攀を終了する。

Ⅱ峰頂上へは涸沢側を巻くように進む。井上パーティが先行してⅡ峰頂上のピナクルで懸垂支点を作成し、５m懸垂下降する。Ⅰ・Ⅱのコルで井上がザイルを回収するために残り、その他のメンバーは到着次第前穂高岳に向かう。前穂高岳頂上で休憩を取り、紀美子平へ向かう夏道を下る。途中からガレ場をトラバースし吊尾根へ向かう。夏道は稜線上より下の方にあるため、あまり登り返さずに進むと良い。比較的スムーズに吊尾根の夏道に合流し、最低コルから少し進んだ所で休憩を取る。ここから奥穂高岳まではクサリ場もあるため気を抜かずに進む。奥穂高岳頂上で記念写真を撮り、すぐに白出のコルへと向かう。例年コル手前のクサリ場付近に残っている雪渓はほとんど溶けておりＦｉｘを張る必要はなかった。白出のコルでスパッツ、オーバー手袋、ピッケルを装着し、直下の急な箇所でグリセードの練習をする。ここで岳沢から登ってきた高野ＯＢと合流した。シュルンドや露岩が無くなる所までは全員で下り、そこからＢＣまで一気に駆け下り帰幕する。

６月２３日　晴のち雨　３℃

＊北穂高岳東稜

小野寺（４）　小島（１）　志村（１）　西出（ＯＢ）

ＢＣ（５：２０）～北穂沢カール（６：２０）～東稜のコル（８：１５）
～北穂高岳（９：００）～最低コル（１０：０５）～白出のコル（１１：０５）
～ＢＣ（１２：００）

６月２１日に登頂できなかった北穂高岳を目指してＢＣを出発する。雪渓を登り、途中で夏道を通過して北穂沢カールから再び雪渓に入る。急雪壁の前からスタカットで東稜のコルへと向かう。東稜のコルでは天気が良く、槍ヶ岳まで一望することができた。ここから雪が少ないため、スパッツとオーバー手袋を外して登る。北穂高岳までは短い雪のリッジを登り、ガレ場の踏み跡を辿って登っていく。その後、急な雪面のトラバースがあったが、４年とＯＢが下に入ってがっちり通過する。再び北穂高小屋を目指して不明瞭な踏み跡を辿ってガレ場を登り、北穂高小屋に着く。頂上からは登攀中の滝谷パーティの様子を見ることができた。松濤岩付近の斜面は、小屋の人によって整地がされており、Ｆｉｘを張る必要はなかった。南峰から道を間違えないように注意して最低コルまで夏道を行く。最低コルからはクサリやハシゴのある急なガレ場が続く涸沢岳を越えて、白出のコルに行く。穂高岳山荘に到着したところでスパッツとオーバー手袋を着け、白出のコルから雪上訓練としてコンティニュアスを行いながら下る。訓練終了後、登攀具を外してＢＣまで一気に駆け下り、整理体操をして行動を終える。

＊ドーム中央稜パーティ　岩附（４）＝井上（２）　高野（ＯＢ）＝関根（２）

ＢＣ（５：００）～北穂高岳南峰（６：３５）～懸垂支点（７：３０）
～登攀開始（７：５０）～終了点（１０：５０）～白出のコル（１２：４０）
～ＢＣ（１３：００）

心配された天気も良好であったため滝谷のドーム中央稜の登攀に向かう。ＢＣから雪渓を繋ぎ途中から夏道に入り北穂沢カールへ向かう。北穂沢カールから南峰への急なトラバースはきれいに整備されていたため難なく進む。稜線へ向かうハシゴを上り、所々雪が残っている夏道を３０分程登ると南峰の肩に出る。肩からはすぐに南峰に着き、ここで登攀具と雨具を着る。縦走路を辿り、ドームの頭を涸沢側から巻き、滝谷側の鎖場を下り、すぐ下の微かな踏み跡を進む。第三尾根の南斜面に沿って、急な岩場とガレ場をトラバースしながら１５分程下る。浮石が非常に多いため、落石に注意しながら慎重に進む。顕著なピナクルの手前から第三尾根を跨いでバンド沿いに東へ出ると残置のピトンが打たれている懸垂支点に出る。このピナクルの奥にカニのハサミのような目立つピナクルがあるので間違えて下り過ぎないように注意する。懸垂支点に捨て縄を掛けて２５ｍ懸垂下降し、バンドから北穂高側にトラバースすると取り付きに到着する。岩附パーティ、高野パーティの順に登攀した。

１ピッチ目　明瞭な凹角からチムニーを登る。始めは簡単だが次第に傾斜が増し、１０ｍ程登るとチムニーとなる。チムニーは上部へ行くほど狭くなりザックを背負ったままだと引っ掛かってとても登りづらい。特にリードはザックを垂らして登攀するほうが登りやすい。出口のチョックストーンは左右の壁に足場を見つけながら思い切り良く乗越して、リッジ上のテラスに出て支点を取る。１ピッチ目が核心であった。

２ピッチ目　支点から簡単な左のリッジを右巻きで５ｍ程登ると一度大きなテラスに出る。テラスから右上し、顕著なカンテを右側から登る。カンテ上部から左壁のフェースに出て、少し登ると短いスラブがあり、立ち込むのに少し勇気がいる。カンテとは別に、テラス沿いに西側へ進むとピトンがたくさん打たれチムニーがあるが、ややハングしているため難しい。スラブを越えると大きなテラスに出て、支点を取る。

３ピッチ目　４０ｍ程の簡単なガレ場のリッジで、ランニングビレイもほぼ要らないくらいだが大きく第二尾根側に巻くのでロープの流れに注意する。岩峰基部で支点を取る。

４ピッチ目　支点から一段右へ下がったところから右の浅い凹角を登る。ホールドが豊富で登りやすい。最後は、緩やかな傾斜となり大きいテラスに出て、支点を取る。最初の支点から左にある凹角はピトンが打たれており、登攀することも可能だが、上部の抜け口が難しい。

５ピッチ目　左上する綺麗なクラックを登る。そのまま左上せず、抜け口から２ｍ程下で一度右側に１ｍ程トラバースして、凹角から終了点のドームの頭の直下に出る。終了点はピナクルで取り、ここで登攀を終了する。

天気も良く、快適なクライミングだった。終了点からはドームの頭に出て、縦走路に戻

り、白出のコルを目指す。ガレた縦走路を進み、涸沢岳に立ち寄り記念撮影をする。涸沢岳からは昨年度の冬山合宿で登った涸沢岳西尾根が見えたが、さすがに外見が全く違い、感慨深かった。涸沢岳からはガレ場を下り、すぐに白出のコルに着く。到着と同時に雨が降り出し、雨具を着てＢＣまでグリセードの練習を交えながら、一気に駆け下る。ＢＣに到着すると北穂高岳東稜パーティが出迎えてくれた。その後、高野ＯＢ、西出ＯＢ、岩附が下山した。

６月２４日　晴　４℃

涸沢（７：００）～本谷橋（８：００）～横尾（８：５０）～徳沢（９：３０）～明神（１０：１０）

天気が不安定であった昨日と比べて、好天に恵まれる。ＢＣを撤収して下山を開始する。入山時よりも雪が解けて軟らかくなった雪渓を下り夏道に入る。夏道はガレており、水が流れ滑りやすくなっていた。本谷橋まで下ると雪は見られなくなり、ここでスパッツ、オーバー手袋、ピッケルをザックにしまう。本谷橋からは平坦な林道を進み、順調なペースで横尾を目指す。横尾大橋を渡り、横尾に到着する。横尾からは競うようにして徳沢を目指す。徳沢で小休止を挟み、徳沢から最後の力を振り絞って明神に向かう。全員が明神に到着した後、整理体操を行う。皆で握手を交わして六月合宿を終了する。

奥穂高岳にて　左から　岩附　志村　小野寺
西出（ＯＢ）　小島　関根　井上

４．夏山合宿

期　間：２０１５年８月３日～８月２１日

場　所：北アルプス　剱岳　真砂沢定地～島々縦走

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
４年　岩附正樹
３年　大山洋平
２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
１年　小島明　志村康介　橋本允聖
ＯＢ　村田岳　西出広平

行動概要：８月　２日　離京　さわやか信州号扇沢行　（新宿２３時発）
３日　入山　扇沢～黒四ダム～内蔵助平手前
４日　～内蔵助平　逆ボッカ
５日　～真砂沢ロッジ（ＢＣ）　逆ボッカ　（小島下山）
６日　ＢＣ～長次郎谷～雪上訓練～ＢＣ
７日　ＢＣ～源次郎尾根～剱岳～長次郎谷～ＢＣ
８日　ＢＣ～八ツ峰上半・下半～ＢＣ
９日　ＢＣ～Ⅵ峰　Ａフェース　魚津高ルート
Ｃフェース　剣稜会ルート　ＲＣＣルート
１０日　ＢＣ～Ⅵ峰　Ａフェース　中大ルート
Ｃフェース　剣稜会ルート　ＲＣＣルート
１１日　真砂沢ロッジ～剱沢キャンプ場　荷下げ
１２日　～五色ヶ原キャンプ場
１３日　～スゴ乗越小屋
１４日　～薬師峠キャンプ場
１５日　～雲ノ平キャンプ場
１６日　～双六キャンプ場
１７日　停滞
１８日　～殺生ヒュッテ
１９日　～常念小屋
２０日　～徳本峠小屋　（小野寺下山）
２１日　～島々　下山

８月３日　晴

扇沢（４：３０）～黒部ダム駅（８：００）～内蔵助出合（１３：００）
～内蔵助平手前（２１：００）

明朝、扇沢に到着し、そこから７時３０分発のトロリーバスに乗って黒部ダム駅に行く。改札は通らず旧日電歩道へ続く出口から駅を出る。旧日電歩道に入るとすぐに九十九折りの下りとなる。道幅が狭く草が生い茂っていて足元が見えにくい。１年生が重荷のためバランスを崩して転倒してしまう場面もあった。下り終えると、黒部川に架かる細い橋を渡り、川に沿った鬱蒼とした道を進む。旧日電歩道はほとんど整備されておらず、倒木や木道の崩壊などが多く見られた。内蔵助出合の５００ｍ程手前の地点で、雪渓により登山道が埋没、崩壊しており、通行不可となっていた。雪渓は今にも崩れそうなスノーブリッジになっており、踏み跡が付いていたが非常に危険であったため、黒部側を渡渉し、対岸の雪渓上から移ることを試みた。しかし予想以上に急流のため、徒渉は不可能と判断し、Ｆｉｘを張ってスノーブリッジを通過することにする。各自の荷物を分け、１年生を通過させた後、上級生で荷物を運んだ。全員無事に通過することができたが、２時間近く時間を取られてしまった。登山道に戻り切れ落ちた狭い道をひたすら進む。内蔵助出合までも、木製のハシゴやロープが張られている危険箇所が続く。天気が良いためか飲料水が不足していたが、内蔵助出合では沢から水を汲むことができた。内蔵助出合を過ぎると大きな岩や木の根が目立つ急登が連続する。ペースが一向に上がらず、１５時を過ぎた時点で、内蔵助平まで行くことが不可能と判断し、開けた場所に荷物をデポし、逆ボッカすることにする。デポ地点から先は道の荒廃はさらに激しくなり、巨大な倒木を越えなければ進めない場所や崩壊地があった。崩壊地にはＦｉｘロープが張ってあるが、重荷では登ることが不可能であったため、荷物を分けて登ったことによりさらに時間が取られる。その後、傾斜は徐々に緩やかになるが、悪路のためかペースは上がらない。日が落ち、これ以上の行動は難しいと判断されたため、内蔵助平手前の広い道に幕営してこの日の行動を終了する。

８月４日　晴　１３℃

内蔵助平手前（９：３０）～内蔵助平（１０：００）～デポ地点（１１：３０）
～内蔵助平（１３：３０）

テントを撤収し、内蔵助平まで行く。川を渡る手前の少し開けた場所にＮｏ．０８テントがようやく１張収まるほどの整地されたスペースがあったためそこに幕営する。大山は体調不良のためテントキーパーとし、残り全員で逆ボッカに向かう。２時間程で帰幕したが、内蔵助平から真砂岳への分岐までの間に、重荷で通過するには、強度、幅の面で不安がある橋があるため、その先まで荷上げすることにする。分岐を越えた先の平坦地に到着し、荷物をデポした後に帰幕する。

８月５日　晴　８℃

内蔵助平（６：００）～ハシゴ谷乗越（９：４５）～真砂沢ロッジ（ＢＣ）（１４：３０）

真砂沢ロッジに向けて、内蔵助平を出発する。昨日デポした荷物を回収し、人の背丈より高い笹薮の中の不明瞭な道をひたすら行く。やがて涸沢に着き、そこからはひたすら沢を詰めていく。岩にペンキでマークが付いているので迷うことはない。涸沢が終わると、九十九折りの急登となる。ここでは道が狭い上に、倒木などが多く非常に歩き辛い。力を振り絞り、何とかハシゴ谷乗越に到着する。乗越からは細いトラバース道を２０分程行き、その後ハシゴ場が連続する急斜面を慎重に下っていく。しばらく順調に下っていたが、ハシゴを下り切った地点で、小島が１０ｍほど滑落したため、ザイルを出し上級生らで救助する。幸い大事には至らなかったが、顔面や身体に裂傷を負っていたため、小島の荷物をデポし、小野寺と一緒に真砂沢ロッジまで先行する。ロッジに到着後には出血は止まっていたが、念のため、真砂沢ロッジで合流した西出ＯＢと共に剱沢キャンプ場の診療所まで空身で向かうこととする。残りの部員は真砂沢ロッジ到着後ＢＣを設営し、岩附と井上で逆ボッカに向かう。逆ボッカ隊は１時間程で帰幕し、小野寺は小島を診療所へ送って１６時頃に帰幕した。その後、小島は頭部の傷を病院で診てもらうために西出ＯＢと共に下山した。

８月６日　晴　１３℃

ＢＣ（６：１０）～熊ノ岩付近（７：５０）～ＢＣ（１１；３０）

ＢＣを出発して剱沢雪渓を登り、長次郎出合から熊ノ岩に向かって長次郎雪渓を登って行く。雪渓の硬さは六月合宿の雪渓より硬く、所々凍り付いた箇所があり、そこを避けるようにして登った。熊ノ岩付近に着き、雪上訓練を開始する。初めは雪上歩行訓練、滑落停止訓練を復習し、スタカット、コンティニュアスの訓練を行う。コンティニュアスの訓練では止めるのに苦労した。最後に下級生だけがシッティングビレイの確認をして雪上訓練を終了した。訓練後はＢＣまで駆け下る。雪渓の凍り付いた箇所はほとんど溶けていたが、それでもあまりスピードが出ずＢＣに着くのに時間を要した。

８月７日　晴　１３℃

ＢＣ（５：００）～源次郎尾根取り付き（６：００）

～第２Ｆｉｘ地点手前（６：５０）～剱岳頂上（１１：１５）

～熊ノ岩（１２：４５）～ＢＣ（１３：２０）

ＢＣから剱沢雪渓を登り源次郎尾根取り付きへ向かう。取り付き手前で登攀具を着け、井上と関根で先行し最初の大岩に２５ｍＦｉｘを張る。例年は大岩から５０ｍピッチを伸ばすが、今年度は大岩を乗越してすぐの灌木でピッチを切ったため、スムーズに通過することができた。最初の大岩からは低い木々の中を縫うように進むと連続した２つの大岩に突き当たる。ここで先行パーティが詰まっていたため３０分程待つ。この２つの大岩にも

４０ｍＦｉｘを張るが、難しいのは２つ目の大岩の出だしだけである。Ⅰ峰まではハイマツの茂る道から次第に岩稜帯の道となる。途中ルンゼルートとの合流地点付近で斜面が崩壊していたため、平蔵谷側のハイマツ帯の中を無理やり巻いて進む。合流地点から先のチムニー上の岩場では、例年湿っていて登りにくいが、連日の快晴のためか乾いていて登りやすい。ここは右のフェースからでも登れそうだが先行パーティが詰まっていたところを見ると難しそうだ。そこからは緩傾斜の岩場を登っていくとⅠ峰に着く。Ⅰ・Ⅱ峰間のコルへはヤセ尾根を慎重に下っていく。Ⅱ峰へはハイマツの茂る急登をひたすら登っていく。Ⅱ峰から大岩を支点にして４０ｍ程の懸垂下降でコルに下り、頂上までは踏み跡のあるガレた道を登っていく。程なくして頂上に到着し、休憩後、長次郎乗越へと下りる。乗越までも浮石が多いガレた道を慎重に下りていく。長次郎左俣の雪渓は上部が切れていたため、左岸のガレ場を伝って行き、雪渓に移ることができた。熊ノ岩を経由し、そこからは駆け下ってＢＣへ帰幕する。

８月８日　晴　１１℃

ＢＣ（５：００）～Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ（６：００）～Ⅱ峰（７：４５）
～Ⅴ・Ⅵのコル（１０：３０）～Ⅵ峰（１１：３０）～Ⅷ峰（１３:００）
～八ツ峰の頭（１４：００）～ＢＣ（１５：３０）

ＢＣを出発し長次郎雪渓を詰め、長次郎出合からⅠ・Ⅱ峰間ルンゼへ向かう。６日の雪上訓練の帰幕時に雪渓からルンゼのガレ場へ下りられる地点を確認していたため、スムーズにルンゼに移ることができた。今年は雪が少なかったためＦｉｘを張る必要もなくルンゼを登り始める。浮石の多い所までは全員でまとまって進み、草付きが多くなる辺りで岩附、井上、関根で先行する。Ⅱ峰の頂上からハイマツで支点を取り、長次郎谷側の岩壁に沿って２５ｍ懸垂下降する。Ⅲ峰へは稜上を忠実に進む。Ⅲ峰からは残置ハーケンを支点にしリッジに沿うように２５ｍ懸垂下降でⅢ・Ⅳのコルへ下りる。Ⅲ・ⅣのコルからⅣ峰へは、コル目の前のピークを行かず手前の長次郎谷側へ伸びる踏み跡を行き、岩峰は三ノ窓谷側のハイマツ帯の踏み跡を辿って行く。上部でハイマツ帯の踏み跡が不明瞭になるが、そこからは稜線に戻るように行けば問題ない。Ⅳ峰頂上から大岩で支点を取り、三ノ窓谷側のルンゼに沿ってⅣ・Ⅴのコルまで５０ｍ懸垂下降する。傾斜が緩いためザイルを絡めないように担いで降りた。Ⅴ峰へは三ノ窓谷側の踏み跡を辿って行き、顕著なピナクルに出る。稜上を忠実に登って行ってもⅤ峰へは行くことができそうだ。ピナクルの手前で長次郎谷側に移り、残置ハーケンで懸垂支点を作る。すぐ下に見えているテラスには下りず、Ⅴ・Ⅵのコル側へ岩壁を伝っていき、バンドまで５０ｍ懸垂下降をする。三ノ窓谷側に少しトラバースし、岩壁にある残置ハーケンを支点にして下のバンドまで２５ｍ懸垂下降をする。踏み跡を辿って三ノ窓谷側のテラスに進み、ハイマツで支点を取って２５ｍ懸垂下降をし、Ⅴ・Ⅵのコルへ下りる。

Ｖ・Ⅵのコルより三ノ窓谷側へ少し進み正面のガリーを直上する。関根が先行しテラスから三ノ窓谷側のフェースに５０ｍＦｉｘを張る。ガレ場を過ぎた所から傾斜の緩い草付きとなり、踏み跡を辿ってⅥ峰頂上に着く。Ⅵ峰頂上からはクライムダウンでも下りられるが２５ｍ懸垂下降をした方が安全である。Ⅵ峰の少し先の小ピークから再び２５ｍ懸垂下降するが、長さが少し足りず途中からクライムダウンでバンドまで下りる。５０ｍ懸垂下降か、一段下のバンドまでクライムダウンしてから懸垂下降した方が良かった。Ⅵ・Ⅶのコルからクレオパトラニードルへ続く明瞭な踏み跡を行きⅦ峰頂上を巻いてⅦ・Ⅷのコルへ行く。Ⅷ峰へ登る地点は分かりにくいが、Ⅷ峰を通り過ぎないように目指して行けば問題ない。Ⅷ峰への登りは、ホールド、スタンス共に豊富な三ノ窓谷側のガリーを直上する。Ⅷ峰頂上の狭いリッジから２５ｍ懸垂下降を２回してコルへ降りる。懸垂支点は残置支点が豊富なため分かりやすい。八ツ峰の頭へはコルから長次郎谷側にトラバースし、階段状の岩場を登って稜線に出る。ここに井上が５０ｍＦｉｘを張る。八ツ峰の頭からは裏側に回り、池ノ谷乗越へ５０ｍ懸垂下降する。浮き石が非常に多く慎重に下りる。池ノ谷乗越からは雪渓が切れているため左岸のガレ場を下り途中で長次郎雪渓に移る。急傾斜の場所は注意して下るが、傾斜が緩くなった地点から駆け下ってＢＣへ帰幕する。ＢＣに帰幕すると村田ＯＢが入山されていた。

８月９日　晴　１３℃

＊Ａフェース魚津高ルート

関根（２）＝橋本（１）　中村（２）＝小野寺（４）

ＢＣ（６：００）～Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ（７：００）～Ａフェース取り付き（８：２０）～先行パーティ登攀開始（９：１０）～後続パーティ登攀開始（１０：００）～Ａフェースの頭（１３：００）～Ⅴ・Ⅵのコル（１４:００）～ＢＣ（１４:３０）

長次郎雪渓を詰めてＡフェース魚津高ルート取り付きに向かう。休日のためか、魚津高ルートにはすでに他パーティが取り付いていたため１～２時間程待機してから登攀を開始する。

１ピッチ目　目の前の顕著な凹角は直登せず、左側にある灌木手前から凹角に移るように登る。小ハングから上部の凹角へ右上する。核心の小ハングは後に引かれて高度感もあり、いやらしいが、ホールドがしっかりあるので丁寧に乗越す。そこからはホールド、スタンス共に明瞭である。左上しながら登っていくとテラスに辿り着き、ここでピッチを切る。

２ピッチ目　カンテ沿いを登り、右の凹角に入る。スタンスが細かく立ちこむのに勇気がいる。カンテを忠実に登って行くとテラスに出る。ここでピッチを切る。

３ピッチ目　３ピッチ目の支点から右の階段状の凹角を登り、簡単な岩場を越えて直上すると大岩が現れる。傾斜が少ないため大岩をそのまま乗越し、程なくしてＡフェースの頭に到着する。支点はハイマツで取ることができる。

先行パーティが到着してから、３０分程遅れて後続パーティもＡフェースの頭に到着した。頭からはハイマツの中の明瞭な踏み跡を辿って懸垂支点まで向かう。傾斜が急でガレている箇所も多いため慎重に行く。残置スリングが掛かっているハイマツで支点を取り、Ｖ・Ⅵのコルへ５０ｍ懸垂下降し、コルから１０ｍ程下った斜面に降りた。

＊ＣフェースＲＣＣルート

井上（２）＝岩附（４）

ＢＣ（６：００）～Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ（７：００）～登攀開始（８：５０）

～Ｃフェースの頭（１１：００）～Ｖ・Ⅵのコル（１２：４５）～ＢＣ（１３：３０）

ＢＣからⅠ・Ⅱ峰間ルンゼ付近までは全員で行き、そこから分かれてＣフェースＲＣＣルート取り付きへ向かう。雪が少なかったため、剣稜会ルート取り付きからガレ場を登って取り付きまで行くことができた。全ピッチ井上がリードした。

１ピッチ目　簡単な浅いルンゼを左上し、テラスでピッチを切る。浮き石が多いので注意する。

２ピッチ目　テラスから右側のフェースをハイマツの下を沿うようにトラバース気味に登る。灌木のあるバンドでピッチを切る。このピッチは３ピッチ目と繋げることができた。

３ピッチ目　バンドから階段状の岩場を登り狭いテラスに出る。

４ピッチ目　浅い凹角を５ｍ程登り、右へトラバースする。凹角はホールド、スタンス共に細かくいやらしい。トラバースはテラスのようになっていて容易である。

５ピッチ目　ホールド、スタンスの豊富な凹角を登り大岩を越えて太いハイマツでピッチを切り登攀を終了する。

Ｃフェースの頭からは２５ｍ懸垂下降を２回、５０ｍ懸垂下降を１回するが、誤ってＶ・Ⅵのコルより５０ｍ程三ノ窓谷側に下りてしまう。雪渓をスタカットでコルまで登り返し、Ｖ・Ⅵのコルで休憩する。他パーティはまだ時間が掛かりそうであったため先にＢＣに帰幕しお茶や嗜好品の準備をする。

＊Ｃフェース剣稜会ルート

大山（３）＝志村（１）＝西出（ＯＢ）

ＢＣ（６：１０）～Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ（７：００）～剣稜会ルート取り付き（８：２０）

～登攀開始（９：００）～Ｃフェースの頭（１４：４０）

～Ｖ・Ⅵのコル（１６：００）～ＢＣ（１７：００）

ＢＣを出発しＣフェース剣稜会ルート取り付きへ向かう。取り付きに着くと登攀中のパーティと順番待ちのパーティが合計３パーティおり、これに続いて登攀を開始する。登攀中は各ピッチで先行パーティの通過を待って登ることとなった。全ピッチ大山がリードした。

１ピッチ目　傾斜の緩やかなスラブを、リッジに向かって左上する。支点は少ないがホールド、スタンス共に豊富で登りやすい。３０m程登り、リッジ上のテラスでピッチを切る。

２ピッチ目　ハイマツ帯の凹角を登っていく。スタンスが細かくなってくるが、プッシングや足を突っ張るようにして登ると次のホールドを取れる所が多い。ハイマツ帯を抜けるとテラスに出る。３０mでピッチを切る。

３ピッチ目　リッジの右側を忠実に登っていく。右へ行き過ぎるとホールドが乏しくなり難しいため、ほとんどリッジ上を通るようにして登る。リッジ上のバンドでピッチを切る。

４ピッチ目　バンドから直上し、剣稜会ルートの核心部であるナイフリッジに出る。ザイルの流れに注意して支点を取り、ナイフリッジを右にトラバースする。壁面は垂直に近く非常に高度感があるが、途中でリッジを乗り越えて回り込むと置きやすいスタンスがある。トラバース後は凹角状のフェースを右上する。途中に狭いバンドがありピッチを切ることもできたが、ザイルを５０m一杯に伸ばして上の広いテラスまで登る。ここでピッチを切る。

５ピッチ目　傾斜の緩やかな階段状の岩場を１０m登り、Ｃフェースの頭に到着する。

Ｃフェースの頭からは踏み跡を辿ってＶ・Ⅵのコルへ向かう。ザレ場を少し行くと急な岩場の下りとなるため、クライムダウンを交えて慎重に下る。捨て縄が多く掛かったハイマツが現れ、そこから長次郎谷側へ下りるよう意識して５０m懸垂下降する。程なくしてＶ・Ⅵのコルに着き、長次郎雪渓を駆け下って帰幕する。

８月１０日　快晴　１２℃

＊Ａフェース中大ルート

関根（２）＝井上（２）＝西出（ＯＢ）

ＢＣ（６：１０）～熊ノ岩下の岩（６：５０）～中大ルート取り付き（８：１０）～Ａフェースの頭（１３：００）

朝、村田ＯＢが下山される。前日同様に、Ｖ・Ⅵのコルまで全力で登る。中大ルート取り付きに到着し、関根のリードで登攀を開始する。

１ピッチ目　凹角内を行かずに左側のフェースを登って行く。スタンスは細かいがしっかり確認して登る。スリングが掛かった支点のある小テラスにてピッチを切る。

２ピッチ目　支点から右下にトラバースするのが正規ルートだが、真横にトラバースする。スタンス、ホールドがほとんどなく支点も全く取れず、緊張感がある。凹角内に支点があり、あと１手でカラビナを掛けられるが手が外れフォールする。中間支点を足元の低い位置に取っていたため、ビレイヤーの井上も下に引かれてフォールする。大きい怪我はないが、井上はビレイしていた手足が岩にぶつかり出血する。関根は３m程下のテラスまで落ち、ビレイされながら自

力で１ピッチ目の終了点まで登り返す。再び関根がリードする。今度は正規ルートを進み右下へトラバースする。凹角内に入ると残置ハーケンがベタ打ちされている。凹角内はホールド、スタンス共に乏しく難しい所はＡ０で登って行く。終了点は新しいボルトが打たれておりしっかりしているが、テラスは狭くビレイは支点にぶら下がる形で行う。

３ピッチ目　井上のリードで登攀する。支点の右側の傾斜の急なフェースを登って行く。５ｍ程登るとハイマツ帯となり、簡単なリッジを登ると魚津高ルートと合流する。ここでピッチを切る。

４ピッチ目　魚津高ルートと同様に簡単なリッジを登りＡフェースの頭に到着して登攀を終了する。頭から少し下った所のハイマツで支点をとり、５０ｍ懸垂下降して直接Ｖ・Ⅵのコルへ下りる。

Ａフェースの頭からは少し下った所のハイマツで支点を取り、５０ｍ懸垂下降して、Ｖ・Ⅵのコルへ直接下りる。Ｖ・Ⅵのコル到着後に西出ＯＢが下山された。

＊Ｃフェース剣稜会ルート

中村（２）＝岩附（４）＝橋本（１）

ＢＣ（６：００）～取り付き（８：２０）～登攀開始（８：４０）

～Ｃフェースの頭（１１：３０）～Ｖ・Ⅵのコル（１３：３０）～ＢＣ（１４：３０）

ＢＣから長次郎雪渓を詰めて熊ノ岩まで登っていく。熊ノ岩からは緩やかな雪渓を進みⅥ峰フェースの下部まで行く。そこからはガレた道を浮石に注意しながら登り、Ｃフェース剣稜会ルートの取り付きに着く。１～５ピッチを中村が、６ピッチ目を岩附がリードする。

１ピッチ目　取り付きからスラブ状の岩場を右に進み、その後、徐々に左にトラバースして登る。ホールドが豊富にあるため快適に登れる。上のテラスにてピッチを切る。

２ピッチ目　テラスからは右にトラバースして凹角を登る。凹角はホールド、スタンス共に不明瞭のため体をねじ込んで登っていく。凹角の中には支点を取る箇所が豊富にある。凹角を抜けてからはホールドがしっかりしている。階段状のリッジを登り、少し狭いテラスでピッチを切る。

３ピッチ目　再びスラブ状の岩場を登っていく。ホールド、スタンス共に豊富で、残置ハーケンも多く打たれている。素直に直上すれば、支点をしっかり取れる。左にあるテラスにてピッチを切る。

４ピッチ目　階段状のフェースを快適に登る。リッジ手前のハイマツ帯にて支点を取り、ピッチを切る。

５ピッチ目　ナイフリッジを右へとトラバースする。ナイフリッジの途中から切れ落ちている箇所があるためナイフリッジの左側に移る。トラバースが終わった所からは残置

ハーケンに沿って正面のチムニーを登る。階段状になっているため快適に登れる。リングボルトで支点を取りピッチを切る。

６ピッチ目　終了点手前でピッチを切ってしまったため、岩附が先に終了点に登り支点を作る。ハイマツがザイルに引っ掛かるので気をつけながら登る。

終了点からは踏み跡を辿って九十九折りのザレた道を下っていく。急な斜面ではあるが、クライムダウンを交えて下れば問題ない。Ⅴ・Ⅵのコルまではハイマツに掛けられた捨て縄を支点として懸垂下降する。Ⅴ・Ⅵのコルからガレた道を浮き石に注意しながら下り、雪渓に移って熊ノ岩が正面に見える所からＢＣまで駆け下る。

＊ＣフェースＲＣＣルート

小野寺（４）＝大山（３）＝志村（１）

ＢＣ（６：１０）～Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ（７：１０）～ＲＣＣルート取り付き（８：００）～登攀開始（８：３０）～Ｃフェースの頭（１１：１０）～Ⅴ・Ⅵのコル（１３：００）～ＢＣ（１４：００）

ＢＣを出発しＣフェースＲＣＣルート取り付きへ向かう。１ピッチ目のみ大山がリードし、その後は小野寺がリードした。

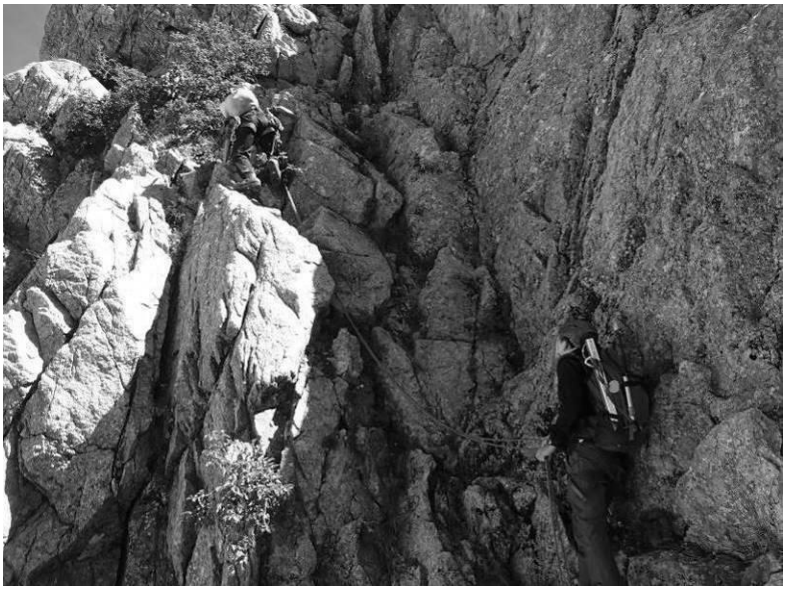
１ピッチ目　傾斜の緩やかなフェースを左上する。あまり支点が取れないがスタンスが豊富で階段状になっているため問題なく登る。３０ｍ程で広いテラスに上がり、剣稜会ルートに近い位置にあるハイマツでピッチを切る。

２ピッチ目　右のハイマツ帯をめがけて傾斜の緩いフェースを登り、ハイマツの手前から灌木を目指して右へトラバースする。潅木からは右上していき、浅い凹角手前の支点で５０ｍのピッチを切る。

３ピッチ目　バンドから浅い凹角を直登していく。途中で傾斜の強い凹角が現れる。左の凹角へトラバースしてハイマツ帯を上がる。ホールドの豊富な岩場を登ると上部のテラスに出る。約４０ｍでピッチを切る。

４ピッチ目　テラスから右の凹角に沿うように登って行く。支点は少ないがホールドは豊富であり、快調に登る。凹角を抜けるとハイマツに突き当たるため、ザイルを引っ掛けないように注意して右側から巻く。全ピッチでザイルを長く出していたため、ハイマツを越え、Ｃフェースの頭直下に到着する。

Ｃフェースの頭からは剣稜会ルートと同様に踏み跡を辿ってⅤ・Ⅵのコルへ向かう。５０ｍ懸垂下降してⅤ・Ⅵのコルに下り、長次郎雪渓を駆け下って帰幕する。



Ａフェース魚津高ルート１ピッチ目をリードする関根、ビレイは橋本

８月１１日　晴のち曇　１０℃

真砂沢キャンプ場（７：００）～源次郎尾根取り付き手前（８：００）
～剱沢キャンプ場（１０：３０）

朝から天気がよく縦走日和である。源次郎取り付き手前まで各々全力で登る。源次郎取り付き手前で休憩を取るが大山が大幅に遅れたため荷を抜く。剱沢キャンプ場までは途中まで雪渓を詰めて行き、雪渓の終わる地点から夏道を進む。夏道を忠実に辿ると剱沢キャンプ場に到着する。キャンプ場は多くの登山者で賑わっていた。到着後、小島の分の重量超過分を荷下げするため小野寺と関根が室堂へ向かう。１５時半頃に荷下げ隊は帰幕した。

８月１２日　曇　１０℃

剱沢キャンプ場（６：３０）～雄山（１０：１０）一の越山荘（１０：５０）
～獅子岳（１３：１０）～ザラ峠（１４：２０）～ＢＣ（１５：２０）

剱沢キャンプ場を出発し、別山までのガレた急坂を登って行く。別山のピークを巻いて稜線を立山方面に進む。稜線の道はガレており、浮石が多く足元に気を付けながら進む。富士ノ折立の急坂を登り、大汝山を越えて雄山に着く。雄山はお盆の時期のためか非常に観光客が多く、それに加え１００人ほどの小学生の渋滞に巻き込まれ、なかなか下りることができず苦労した。一の越山荘からは竜王岳、鬼岳、獅子岳と越えて行く。鬼岳から獅子岳の途中、雪渓が残っており気を付けて進む。獅子岳からザラ峠までの下りは浮石が多く、ハシゴもあったため注意して進んだ。ザラ峠から五色ヶ原までの急登は予想以上に長く、心が折れかけた。急登を登り終えると、木道が現れ、しばらく進んで五色ヶ原キャンプ場に着いた。

８月１３日　雨　１０℃

五色ヶ原キャンプ場（５：４０）～鳶山（６：４０）～越中沢岳（８：００）
～スゴノ頭（９：００）～スゴ乗越小屋（１０：３０）

この日は午後から天気が崩れるという予報のため、出発を早めたが朝の段階ですでに雨が降っていた。五色ヶ原キャンプ場を出発して、濡れて滑りやすい木道を注意して進む。木道からガレ場を登り、鳶山を越えて、越中沢岳に向かう。越中沢岳の緩やかな登りを終えて、岩稜帯を下る。例年、ロープが張ってある急な岩場の下りは、岩の下を巻く道が新たに整備され、通行止めになっていた。岩稜帯を下り終えると、スゴノ頭までは急登となり、スゴノ頭からはスゴ乗越に向かって下りて行く。急登の後は樹林帯を下り、スゴ乗越小屋への道をアップダウンを繰り返して最後の急登を登る。スゴ乗越小屋までの道は意外と長く、残置ロープを使って登るザレ場もあった。急登を登り切るとスゴ乗越小屋に着いた。

８月１４日　雨　１２℃

スゴ乗越小屋（７：４５）～間山（９：００）～薬師岳（１２：００）
～薬師岳山荘（１２：３０）～薬師峠キャンプ場（１３：１０）

昨日から雨が降り続いており７時まで天気待ちをした。雨が降っていたが雨具着てスゴ乗越小屋を出発する。ハイマツ帯の急登を登り、雨により水が溜まった登山道をひたすら進むと間山に到着する。ここから北薬師岳まではガレた岩稜帯の道は足を踏みはずさないよう気をつけながら登って行く。程なくして北薬師岳のピークに着くが、雨風が強いので先を急ぐ。薬師岳への急登を登り、しばらく行くと薬師岳の頂上に着いた。天気が悪く景色が見えないのが残念であった。山頂で写真を撮り、薬師岳山荘までの九十九折りのザレ道を下り、薬師岳山荘で休憩をとる。さらに下るとガレ道が続いた後、木道になり、薬師平からは涸沢を下っていく。途中から雨により増水しており、滑って転ばないように注意しながら下る。さらに進むと薬師峠キャンプ場に到着した。

８月１５日　晴　５℃

薬師峠キャンプ場（６：４０）～太郎平小屋（８：００）～薬師沢小屋（９：００）
～雲ノ平キャンプ場（１２：４０）

薬師峠キャンプ場から太郎小屋方面へと向かう。太郎平小屋までは平坦地の木道をひたすら進む。北ノ俣岳への分岐を通り過ぎ、薬師沢へのザレた道をひたすら下っていく。下り切ると、木道となる。薬師沢右岸に渡り、再び左岸に移った所から、急な木のハシゴ場が出てくる。ハシゴを登り切ると、平坦な木道がしばらく続く。途中のベンチで休憩し、その後は樹林帯の中のアップダウンのある道を行く。やがて道は再び木道となり、狭く切れ落ちた稜上を越えると、薬師沢小屋に到着する。そこで大山と大きく離れてしまったの

で、小野寺が残り、他のメンバーは先行することにする。薬師沢小屋からは吊り橋を渡り、ハシゴを下り切った所から沢を巻く。沢が増水している場合は、目の前のハシゴを再び登り返さなければならないようだ。高天原と雲ノ平の分岐点は大きな看板があり、間違うことはない。雲ノ平への急登は、最初はハシゴが掛けられており、その後は鬱蒼としている岩場の登りとなる。急登を登り切ると木道が現れ、しばらく歩くとアラスカ庭園に到着する。そこからはひたすら緩やかなアップダウンのある木道を行く。奥日本庭園、雲ノ平山荘を通り過ぎるとキャンプ場への分岐があり、そこから木道を少し下ると雲ノ平キャンプ場に到着する。後続は先行パーティから１時間程遅れて到着した。

８月１６日　晴　１０℃

雲ノ平キャンプ場（６：３０）祖父岳（７：４０）～鷲羽岳（９：３０）
～三俣蓮華岳（１１：３０）～双六岳（１２：５０）～双六キャンプ場（１３：１０）

雲ノ平キャンプ場を出発して、まずは祖父岳に向かう。キャンプ場から直接上がれる道は植生保護により通行止めになっているため、大きく迂回する。キャンプ場への分岐まで登り返し、ひたすら木道を祖父岳直下まで進む。ガレ場の急登を行き祖父岳の山頂に到着する。そこからは、岩苔乗越、鷲羽岳経由で三俣へ向かう。ワリモ岳の頂上直下の巻き道は切れ落ちており、注意して進む。九十九折りの急坂を登り切ると、鷲羽岳の山頂に到着し写真を撮って、三俣山荘へと一気に下る。三俣山荘で志村の靴のソールが剥がれていたため、修理に時間を取られる。三俣山荘からは巻き道コースの分岐まではなだらかなガレ場を登って行き、三俣蓮華岳、双六岳経由で双六小屋に向かう。三俣蓮華岳への急坂は、巻き道コースを選ばなかったこともあり、皆苦しそうだ。山頂からは稜線を進み、１時間程で双六岳に到着する。双六小屋への下りを進むと、やがて双六小屋の赤い屋根が見え始めた。一気に駆け下り双六キャンプ場に到着した。

８月１７日　雨　１０℃

夜から降り出した雨が朝まで止まず、天気図でも前線の影響が顕著に見られたためこの日は停滞とする。１４時に予備日分の食糧を解放し、焼きそばを作って食べた。夕食後、雨は降ったり止んだりするものの強風が吹き荒れる。１９時になっても強風が収まらないので、皆でテントを抑えながら就寝した。今合宿初めての停滞であったが慌ただしい１日となった。

８月１８日　曇　１０℃

双六キャンプ場（６：３０）～樅沢岳（７：３０）～千丈沢乗越（９：２０）
～槍ヶ岳山荘（１０：１０）～槍ヶ岳（１０：４０）～殺生ヒュッテ（１１：２０）

一日停滞後、双六キャンプ場を出発する。周囲はガスに覆われており、見通しが悪い。樅沢岳を越え、西鎌尾根をひたすら進む。硫黄乗越では、大きな看板が立てられており、

ここ最近整備されたことが窺えた。千丈沢乗越の手前ではクサリ場があり慎重に通過する。千丈沢乗越から槍ヶ岳の肩への九十九折りの急登をひたすら登る。槍ヶ岳山荘の近くにザックを置いて、頂上へと向かう。槍ヶ岳の頂上ではガスにより周囲の景色を臨むことができなかった。槍ヶ岳の頂上から下りて、槍ヶ岳山荘から下方に見える殺生ヒュッテまで槍沢を下り、２０分程で殺生ヒュッテのテント場に到着した。

８月１９日　晴　８℃

殺生ヒュッテ（５：３０）～水俣乗越（７：１０）～ヒュッテ西岳（８：００）
～ビックリ平（９：００）～大天井ヒュッテ（９：４０）～大天荘（１０：４０）
～横通岳（１２：１０）～常念小屋（１３：００）

殺生ヒュッテの脇からヒュッテ大槍に伸びる道を進み、東鎌尾根に着く。そこから足場の悪い危険地帯を進み、いくつものハシゴ場を慎重に通過する。水俣乗越から西岳へは、狭く、クサリ場が多い急登を登る。急登を登り切ってもなだらかな稜線が続き、やっとの思いでヒュッテ西岳に着く。ここからは、緩やかな上り下りを繰り返す道を行く。ビックリ平から先は、稜線から外れるため、木々が生い茂っていて歩きづらい。程なくして大天井ヒュッテに着く。大天井ヒュッテから狭くガレた道を１時間程登ると大天荘に着く。大天荘からはザックを置いて大天井岳山頂へと向かう。大天井岳山頂からは連日の悪天候と打って変わって雲海を一望できた。山頂から横通岳までは稜線を進み、横通岳からガレ場を下って、急な樹林帯を下り切ると常念小屋に到着した。

８月２０日　雨　８℃

常念小屋（５：３０）～常念岳（６：３０）～蝶槍（９：００）
～蝶ヶ岳（１０:００）～大滝山（１１：００）～徳本峠（１５：００）

視界こそ良いが、空は雲に覆われている。常念小屋を出発し、常念岳まではガレた九十九折りの急登を登る。１時間程で常念岳の山頂に到着したが、穂高岳から槍ヶ岳の稜線に笠雲があったため、今後の天候の悪化が懸念される。ガレ場を慎重に下っていくと、徐々に樹林帯の中に入り、ぬかるみや倒木が目立つようになる。やがて樹林を抜けハイマツ帯の急登になり、登り切ると蝶槍に到着した。蝶槍からは緩やかな稜線が続き、その先で小野寺が実習のため途中下山した。１時間程で蝶ヶ岳の頂上に到着する。蝶ヶ岳の分岐を南東に進み大滝山に向かう。大滝山北峰を通り過ぎると、すぐに大滝山に着いた。大滝山までは人が通っていないのか、登山道が大分草に覆われている。大滝山から徳本峠までは、展望のきかない樹林帯の道となる。風景の変わらない緩やかな上り下りを３時間ほど行くと、やがて徳本峠小屋が見えてくる。小屋が見えると、一気に駆け下った。

８月２１日　雨　１０℃

徳本峠小屋（６：３０）～岩魚留小屋（７：１０）～二俣（８：５０）

～島々（１０：１０）

朝から雨が降っていたため雨具着て出発する。岩魚留小屋までの急坂でスリップしないように気をつけながら駆け下る。二俣までの途中に崩壊している箇所などあったが気をつけながら通過する。雨に濡れ滑りやすくなっている橋などで転ばないように速度を落として進む。二俣からは穏やかな林道をノンストップで走り抜け徳本峠入口に到着した。ここで整理体操を行い、夏山合宿を終了した。

左から　小野寺　関根　岩附　大山　志村　井上　橋本　中村　西出（ＯＢ）

下山後に徳本峠にて　左から　関根　井上　橋本　志村　岩附　大山　中村

小島滑落事故報告書

事故詳細

事故発生日：８月５日　11 時 10 分

行程：内蔵助平～真砂沢ロッジ　移動

行動詳細

6：00　内蔵助平　発

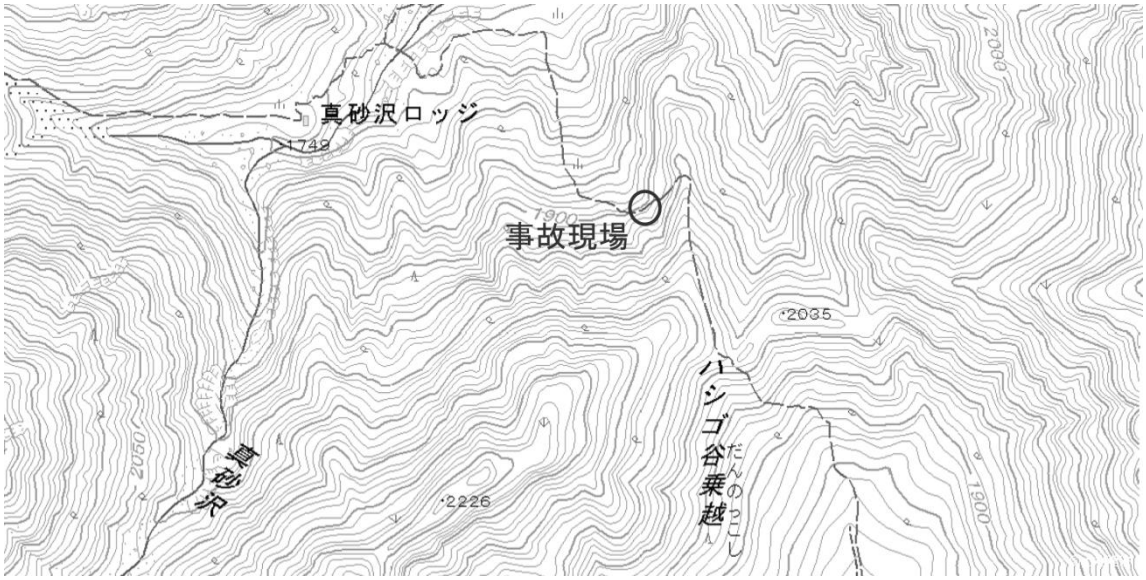
9：45　ハシゴ谷乗越　到着

この時点では小島には余裕があったため、荷抜きは行っていない。

11：10　ハシゴを越えた 1900m地点で小島が滑落する。滑落の衝撃で起きた落石により、頭部を負傷する。岩附、小野寺で、小島とザックを引き上げ、応急処置を施し、小野寺が付き添い、先に真砂沢ロッジまで行くことにする。その際には小島は空身で下らせ、個人装備は小野寺が持つ。持ちきれない装備は、事故現場にデポし、後に岩附、井上が逆ボッカする。小島は下る際は、事故のショックのためか、軽度のパニック状態にはなっていたが、足取りはしっかりしており、歩行は特に問題はなかった。

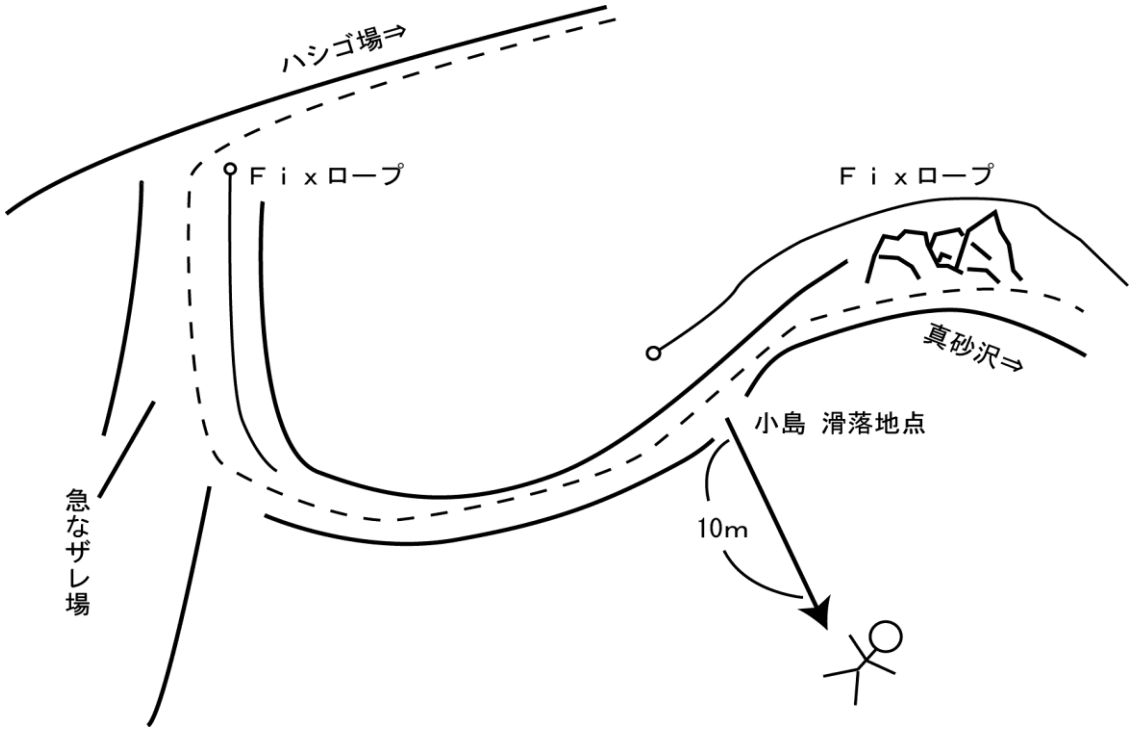
13：00　小島、真砂沢ロッジ到着。入山された西出ＯＢと合流。小島は血は止まっていたが、頭部の傷のため、剱沢の診療所まで連れて行くことにする。

14：40　剱沢到着。警備隊の人とも相談し、富山市の病院に連れて行くことにする。ここで小野寺は真砂沢ロッジに戻り、西出ＯＢが付き添いで行くことにする。



事故地点

事故が起こった地点は、ハシゴ場が終わり、ロープがＦｉｘしてある急なザレ道を下りきった 1900m地点で起こった。その滑落地点より先は、再びロープがＦｉｘしてある岩場があったが、滑落地点付近はさほど危険な場所ではなかった。



事故原因

当時、岩附、関根、小島、井上、橋本、大山、志村、中村、小野寺の順で行動していた。まず、最初のザレ場を下り、次の岩場が見えたため、岩附が先行し、追うように関根、小島の順で行った。関根が岩場に差し掛かった辺りで、小島が足を滑らせて、沢に 10m滑落した。小島によると、足を踏み外し、そのまま転落したとのことであった。

小島の怪我について

富山市民病院で診察を受けたところ、頭部の骨や脳に異常は見られなかった。9 月 3 日現在でも、頭部の傷はほとんど塞がっており、生活などに大きな支障などはでていない。

５．秋山合宿

期　間：２０１５年１０月２日～１０月６日

場　所：北アルプス　島々～折立縦走

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
　　４年　岩附正樹
　　２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
　　１年　小島明　志村康介　橋本允聖

行動概要：８月　２日　離京　入山　島々～二俣
　　３日　～横尾
　　４日　～双六キャンプ
　　５日　～雲ノ平キャンプ場
　　６日　～折立　下山

１０月２日　晴
　徳本峠入口のゲート（１１：００）～二つ目のゲート（１１：４５）～二俣（１２：３０）
　新島々駅からタクシーで、徳本峠入り口の先にある野生動物侵入防止柵のゲートまで入り、ここから出発する。このゲートはクサリで簡易的に閉じられており、開けると奥の駐車場まで一般車両も入ることができる。前日の雨で水が流れて滑りやすくなっている島々谷川沿いの林道をひたすら進む。所々崩壊した箇所があり、しばらく進むと二つ目のゲートに到着する。天気はスッキリと晴れており、木漏れ日が差し込んでくる。二つ目のゲートを越えていくと大雨により道が土砂崩れで完全に塞がっていたため、慎重に通過する。しばらく進むと二俣に到着した。沢の水が濁っていたため、二俣から５分程手前の林道脇の湧水から水を汲む。

１０月３日　晴　５℃
　二俣（５：００）～岩魚留小屋（７：００）～力水（８：４５）～徳本峠（９：３０）
　　～白沢出合（１０：３０）～徳沢（１１：２０）～横尾（１２：２５）
　二俣から川沿いの登山道をひたすら進む。天気は良く、道も時折アップダウンがあるもののほとんど平坦で歩きやすい。２０１１年時点で壊れていた橋はすべて修繕されていた。途中の沢ではいくつか崩壊している所や増水している所もあるため、足場を確認しながら進む。岩魚止小屋から急峻になる登山道を進み、徳本峠へと続く九十九折りの急坂を登る。途中の力水を通過して徳本峠に到着した。峠では風が強く寒かったが、視界が良く明神岳

を望むことができた。徳本峠からは沢沿いに白沢出合まで一気に駆け下り、時間的に余裕があったため横尾まで進む判断をする。平坦な道をひたすら進み、徳沢を通過し、梓川沿いの道を進んでいくと横尾に到着する。横尾大橋の下のキャンプ場に幕営し、その日の行動を終えた。この日に橋本と渡邊ＯＢが上高地より入山され、１５時頃に横尾にて合流した。

１０月４日　晴　３℃

横尾（５：１０）～槍沢ロッジ（６：２０）～ババ平（７：１０）～大曲（７：３０）～グリーンバンド（８：５０）～槍ノ肩（１０：２５）～槍ヶ岳頂上（１０：５５）～千丈沢乗越（１２：２５）～硫黄乗越（１３：４５）～双六キャンプ場（１４：３０）

横尾から一ノ俣谷、ニノ俣谷の橋を越えると槍沢ロッジに着く。平坦地は砂利と土の混ざった道を進み、そこからババ平までは途中で大きな岩が点在する緩やかな登りを行く。分岐までは沢沿いの細い道を行くが、日曜日ということもあり登山者が多く、道をすれ違う際は気を使って進んだ。ババ平を過ぎてから大曲で渡邊ＯＧが下山された。そこからは３０分程で天狗原分岐に着く。天狗原分岐の先には水場が一箇所ある。九十九折りになった道を進んで行く。ハイマツ帯の多くなるグリーンバンドに入ると風が強く吹き付け、肌寒く感じられる。ここで雨具を着用し、槍ノ肩までガレた道を進む。殺生ヒュッテを過ぎ、九十九折りの急登をひたすら登ると槍ノ肩に着く。槍ヶ岳山荘の近くにザックを置き、槍ヶ岳の山頂に向かった。山頂は快晴で、夏山合宿では見ることができなかった周囲の景色が臨めた。肩から千丈沢乗越までは九十九折りのガレた道を下る。ここから硫黄乗越までは緩やかなアップダウンのある道を進み、途中のクサリ場は上級生が下級生の下にガッチリ付いて慎重に通過した。最後に樅沢岳への急登を登り切り、山頂から一気に駆け下って双六キャンプ場に到着しテントを設営した。その後温かい紅茶とココアを飲み、長時間行動の疲れを癒した。

１０月５日　晴　０℃

双六キャンプ場（６：２０）～双六岳（７：２０）～三俣蓮華岳（８：２０）～三俣山荘（８：５０）～鷲羽岳（１０：１５）～祖父岳（１２：００）～雲ノ平キャンプ場（１２：４５）

朝から双六キャンプ場は風が強く、気温も低かったため毛手袋と雨具を着て出発する。双六岳への急登を登って行き、巻き道コースは行かずに急登を登り切ると双六岳に到着する。双六岳からはガレた稜上を下り、九十九折りの急登を登って三俣蓮華岳に着く。ここから三俣山荘まで急坂を下っていく。上から三俣山荘の屋根は見えていたが、とても長く感じた。三俣山荘から目の前にそびえ立つ鷲羽岳に圧倒されながらも鷲羽岳の急登を登り、アップダウンを繰り返しながら稜線上を進む。途中のロープが固定された場所は慎重に進み、祖父岳を越える。そこから雲ノ平キャンプ場まで下って行く。途中、一瞬だけ雲ノ平

山荘が見えるがなかなか着かない。ガレ場を下って、木道をひたすら進んで雲ノ平キャンプ場に到着した。

１０月６日　晴　－４℃

雲ノ平キャンプ場（５：３０）～薬師沢小屋（７：３５）～太郎平小屋（９：４５）～折立（１１：４０）

合宿最終日も晴れて、気持ち良く雲ノ平キャンプ場を出発する。風はあまり強くなかったが気温が低かったため、この日も毛手袋と雨具を着て出発した。木道は朝露が凍結して滑りやすく一歩一歩に気を配りながら進んだ。木道が終わり、薬師沢までの急坂は苔の生えた石や木が多く慎重に下った。最後にハシゴ場を越えて、吊り橋を渡って薬師沢小屋に到着する。薬師沢小屋のテラスは解体されており、小屋閉め間近であった。そこから、狭い尾根を登り木道に入る。木道をひたすら進んで、樹林帯に入り沢を数回渡る。途中、急なザレ場のトラバースがあった。鉄製の橋を通り過ぎると再び平坦な木道が続く。木道を進み、橋を渡った地点から九十九折りの急登が始まる。ここは整備が行き届いており非常に登りやすい。徐々に視界が開け、４０分程で太郎平小屋に到着する。そこから整備された登山道を下る。３０分程で五光岩ベンチを通り過ぎ、１時間程で樹林帯に入って樹林帯の中の急坂をひたすら下って行く。急坂を下り切り、樹林帯を抜けて、折立に到着する。ここで整理体操をして秋山合宿を終了した。

双六岳にて　左から　井上　中村　関根　岩附　志村　小野寺　小島

６．耐寒合宿

期間：三ツ峠　２０１５年１１月２１日～２３日
　　富士山　２０１５年１２月　４日～　７日

場所：御坂　三ツ峠
　　富士山　御殿場口

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
　　４年　岩附正樹
　　２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
　　１年　小島明　橋本允聖
　　ＯＢ　村田岳　安済共　高野優　西出広平　渡邊葉月

行動概要：(三ツ峠)
　　１１月２１日　離京　三つ峠駅～達磨石～馬返し～屏風岩付近（ＢＣ）～屏風岩～ＢＣ
　　１１月２２日　屏風岩～ＢＣ～屏風岩～ＢＣ
　　１１月２３日　ＢＣ～屏風岩～ＢＣ～達磨石～三ツ峠グリーンセンター

　　(富士山)
　　１２月　３日　離京　御殿場駅～御殿場口新午後青梅
　　１２月　４日　入山　御殿場口新五合目～日の出館（ＢＣ）
　　１２月　５日　ＢＣ～大タルミ沢～雪上訓練～ＢＣ
　　１２月　６日　ＢＣ～大タルミ沢～銀名水～剣ヶ峰～お鉢巡り～ＢＣ
　　１２月　７日　ＢＣ～雪上訓練～ＢＣ～御殿場口新五合目　下山

（三ツ峠）
１１月２１日　晴
　三つ峠駅（７：１０）～達磨石（８：１０）～馬返し（９：２０）
　　～屏風岩付近（ＢＣ）（１０：４０）～屏風岩（１１：１５）～ＢＣ（１６：３０）
　三つ峠駅前で整理体操をした後、緩やかな登山道を登っていく。１年生にとっては初めての冬靴で慣れない様子はあるが、元気よく進んでいく。達磨石を過ぎてからは本格的な登山道に入り、順調に進む。馬返しを抜けてからは、小休憩を挟むことなくＢＣまで一気に登っていく。屏風岩付近でテントを設営した後、登攀に向かう。屏風岩に着いて渡邊Ｏ

Ｇと合流した。その後、毛手袋とアイゼンを着けて登攀訓練に移る。岩附が左にトップロープを張り、中央のリードは井上、右ルートは関根がそれぞれリードで登る。中央にもトップロープを張り、何度も訓練する。上級生は初めてのリードではあったが快調に登っていた。１年生は毛手袋を着けた状態での登攀具の扱いに多少不慣れな様子が見られたが、だんだんとスムーズに登攀できるようになっていった。１６時頃渡邊ＯＧが下山された。今日は土曜であったが他のパーティは少なかったため何度も登ることができ、充実した内容の登攀をした。

１１月２２日　曇　４℃

ＢＣ（６：４０）～登攀開始（６：５０）～ＢＣ（１２：３０）～屏風岩（１３：４０）～ＢＣ（１６：３０）

屏風岩に移動し、一般ルートの右、左、中央をリードとトップロープで登り込む。昨日の感覚とムーブを思い出しながら、アイゼンの爪を利かせて登る。屏風岩では始終、気温が低く、霧が掛かっており富士山を見ることができなかった。昼食前に空中停止と登り返しの訓練をする。登り返しは思っていた以上に大変で練習が必要だと感じた。昼食後、一年生は一般ルートを確実に登れるようにさらに登り込んだ。夕方頃に上級生はリーダーピッチにトップロープを張り、しっかり登り込んだ後、ＢＣに帰幕する。

１１月２３日　曇　３℃

ＢＣ（６：３０）～屏風岩（６：３５）～ＢＣ（１１：１０）～三ツ峠グリーンセンター（１３：００）

ＢＣを出発し、屏風岩にて登攀を開始する。各パーティに分かれ、トップロープとリードで一般ルートを登りこむ。最終日なのでアイゼンと毛手袋での登攀にも慣れて皆スピードも上がってきた。途中からは各パーティに別れアブミの練習やリーダーピッチを登った。天候が悪化してきたことを考慮して早めに登攀を切り上げ、ＢＣに戻りテントを撤収し、三ツ峠グリーンセンターに駆け下った。ここで整理体操を行い耐寒合宿の三ツ峠を終了した。

（富士山）

１２月４日　雪のち晴　－５℃

御殿場口新五合目（６：２０）～六合目（１０：２０）～日の出館（ＢＣ）（１３：００）

前日の夜に出発し、御殿場駅からタクシーで御殿場口ルートまで向かう。ここから１時間ほど歩き、御殿場口新五合目で幕営した。テントを撤収し風が強い中出発する。小雪が舞っており寒く感じられた。砂利に足をすくわれ、なかなかペースが上がらない。旧二合

八勺中継小屋跡地（次郎坊）を過ぎ次第に斜面は急になる。このあたりで西出ＯＢと高野ＯＢが入山された。途中、風で体が倒されそうになり体力を削がれた。標高が上がるにつれて呼吸が苦しくなりすぐに息が上がる。六合目を越えると雪が多くなりクラスト斜面となって、また強風により砂利や雪が飛んできたため、アイゼンとヘルメットを装着する。アイゼンの爪が引っ掛からないように気を付けながらひたすら九十九折の急登を上り続ける。やっと日の出館が見え、最後の力を振絞りながら登った。小屋に着き、小屋にできた吹き溜まりを崩して平らにし、急いで整地をした。ＢＣを設営し行動を終えた。

１２月５日　晴　－１３℃

ＢＣ（７：３０）～大タルミ沢（８：００）～ＢＣ（１２：３０）

晴れてはいるが、昨晩から風が強い。スパッツ、アイゼンを着けて大タルミ沢に向かう。３０分程で大タルミ沢に到着し、雪上訓練を始める。アイゼンの爪を効かせるために足をフラットに置くことを意識した。続いて滑落停止訓練に移る。滑落停止訓練では雪面にアイゼンを引っ掛けないように足を上げるように意識した。その後、スタカット、コンティニュアスの訓練を行う。上級生と１年生の３パーティに分かれて訓練し、しっかりと止めることができた。最後に雪崩埋没者捜索訓練を行った。素早く発見し、スムーズに救出することを意識しながら、一連の流れを確認した。その後、高野ＯＢよりビーコンの特徴について講習を受け、ＢＣに帰幕する。１３時頃に村田ＯＢが入山され、１４時頃に安済監督が入山された。西出ＯＢと高野ＯＢは同時間帯に下山された。

１２月６日　晴のち曇　－８℃

ＢＣ（７：００）～大タルミ沢（７：３０）～剣ヶ峰（１１：１５）

～ＢＣ（１３：００）

朝の冷え込みが緩く、風も弱いため予定通り頂上に向かうことにする。昨日と同様にまずは大タルミ沢まで行き、雪上歩行訓練をする。３日目ということもあり１年生はアイゼンでの歩行にも大分慣れてきたようだ。その後スタカットとコンティニュアスの訓練をしつつ山頂に向かう。山頂に近付くにつれ、頭痛が酷くなる者がいたため、呼吸を意識して歩かせる。途中から夏道に合流し、九十九折りの道をひたすら登って行く。夏道は風で雪が吹き飛ばされており、砂利が露出していて歩きにくい。ペースに差は出たものの銀名水までは全員行くことができた。橋本は高山病の症状が重く疲労していたため安済監督と共に先にＢＣまで戻り、残りの者はお鉢巡りをする。剣ヶ峰では一瞬だけ上半身裸になり記念写真を撮る。途中膝くらいまで雪がある所もあったがほとんどは歩きやすいクラストした道であり、風も弱かったため１時間程で回り終えた。午後からは天気が崩れることが予想されたため急いでＢＣへ戻る。

１２月７日　晴　－８℃

ＢＣ（７：００）～雪上訓練（７：０５）～ＢＣ（９：１０）

～日の出館出発（１０：００）～御殿場口新五合目（１１：００）

昨晩から無風で朝も天気が良く暑いくらいである。朝から橋本が体調不良で食欲もないため、雪上訓練を行わずに安済監督に付き添ってもらい下山させることにする。同時に村田ＯＢも下山された。橋本以外のメンバーはＢＣのすぐ上の斜面で雪上訓練をする。雪上歩行、コンティニュアンス、スタカット、滑落停止訓練を復習する。１年生も大分アイゼンに慣れてきている。滑落停止は形がきれいになるまで何度も繰り返した。訓練終了後、ＢＣに帰幕し、撤収して下山に移る。下山路は大砂走を進む。途中で雪が無くなったのでアイゼンを外し、一気に御殿場口新五合目まで駆け下って耐寒合宿を終えた。

富士山山頂、銀明水にて上段より　井上　小野寺　岩附　関根

下段より　中村　小島　橋本

７．冬山合宿

期　間：平成２７年１２月２５日～１２月３０日

場　所：北アルプス　爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳南峰

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
　　４年　岩附正樹
　　２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
　　１年　小島明　橋本允聖
　　ＯＢ　高野優　小林新平　西出広平

行動概要：１２月２５日　離京　新宿西口バスターミナル～松本～信濃大町～鹿島山荘
　　入山　鹿島山荘～爺ヶ岳取り付き（Ｃ１）
　　～１６５０ｍ　荷上げ
　　１２月２６日　～１７６０ｍ（Ｃ２）　移動・逆ボッカ
　　１２月２７日　～２３８０ｍ　荷上げ
　　１２月２８日　～２４７０ｍ（ＡＣ）　移動・逆ボッカ
　　１２月２９日　～鹿島槍ヶ岳南峰　アタック
　　１２月３０日　２４７０ｍ～１７６０ｍ～爺ヶ岳取り付き　下山

１２月２５日　曇
　鹿島山荘（１１：００）～取り付き（１０００ｍ）（Ｃ１）（１１：０５）
　　～１６５０ｍデポ地点（１３：５０）～Ｃ１（１５：００）

　早朝、新宿で小林ＯＢと合流し、新宿６時発のバスに乗り松本に向かう。松本からは電車で信濃大町駅まで向かい、駅からジャンボタクシーで鹿島山荘まで行く。鹿島山荘の手前には小さな駐車場と看板があり分かりやすい。山荘は人が不在のようであった。敷地内を過ぎてすぐのオババの碑から取り付きに向かう。林道になっており迷わない。５分ほど進み、急登の手前の平地にＣ１を設営する。周囲にはまったく積雪がなく、秋山のようであった。時間があるため、Ｃ２予定地に向けて荷上げをする。最初の急登は落ち葉が積もっているため、踏み跡を見失わないように足元に気をつけながら登る。１３００ｍより徐々に傾斜が緩くなり、積雪が見られるようになってきた。雪質は締まっており歩きやすいが、溶けた雪でぬかるんでおり滑りやすい。稜線に出ると積雪が多くなってきたため、スパッツとオーバー手袋を着ける。１６３０ｍのピークを登り、１６５０ｍ地点の巨大な木の下に荷物をデポしＣ１に帰幕する。水はＣ１近くの小川から汲み、融雪の必要はなかった。

１２月２６日　雪のち曇　－４℃

Ｃ１（７：００）～１４７６ｍ（８：５０）～１６５０ｍデポ地（１０：１０）～１７６０ｍ（Ｃ２）（１１：２５）～１６５０ｍデポ地（１２：１０）～Ｃ２（１２：５０）

朝から薄っすら雪が降っている。取り付きから１４００ｍ地点までの急登は、雪が融けたことによるぬかるみや落ち葉で滑りやすくなっているため歩き辛い。急登を抜けた１４５０ｍからは、やや積雪が多くなる。昨日のトレースが薄っすら残っているため、それを頼りに進む。さらに尾根に沿って樹林帯の急登を３０分程登ると１６００ｍのデポ地に辿り着く。デポ地からはトレースが無くなるためひざ下程度のラッセルがある。新雪のため雪質が軟らかく、簡単に雪が崩れてしまうため歩き辛い。所々木の幹を跨いで通過する場所が現れるが、Ｆｉｘを張るような危険地帯はない。樹林帯の緩やかな傾斜の尾根をひたすら登って行く。デポ地から１時間程進むと広い台地状の１７６７ｍに出る。時間に余裕があるため上級生３人が先行して偵察するが、幕営適地である１９７８ｍは視界不良のため確認できず、途中にも幕営できそうな場所がなかったため、先に進まず１７６０ｍにＣ２を設営する。上級生はテント設営後に逆ボッカのためデポ地に向かう。デポ地から戻ると、標高が上がっているためか少し寒く感じられるが、雪は止んでいた。またこの日の１５時頃に西出ＯＢが入山された。

１２月２７日　雪　－１６℃

Ｃ２（６：３０）～２３８０ｍ（１２：５０）～Ｃ２（１４：３０）

昨日から降り続いた雪により積雪が多くなっているため、ワカンを着けて出発する。降雪直後のためか、締まっていない雪質により猛ラッセルとなる。ラッセルを交代しながら緩やかな広葉樹林帯の尾根をひたすら登る。進むのに邪魔な木の枝が多くあるため、雪が深いところではラッセルに苦労する。１８１０ｍの小ピークを越えると、尾根幅は広くなり幕営適地が多数見られた。そこから１９７８ｍまでは登りやすい斜面が続く。１９７８ｍピーク付近は広く、ここも幕営適地であった。ここから徐々に尾根が狭まってくる。２１９８ｍピークの直下は、尾根が不明瞭の急な斜面になっており、直上の稜線を目指して登る。ピークを抜けると、南側が特に切れ落ちたヤセ尾根になるため滑落に注意して進む。周囲はガスがかかり、視界が悪い。２２２０ｍでナイフリッジがあり、井上がリードしＦｉｘを張る。灌木を始点にして、中間はハイマツ、立木で支点を取り、終点はハイマツで取る。４０ｍでピッチを切った。一年生は上級生やＯＢについてもらいながら慎重に通過した。さらに進み白沢天狗尾根とのＪＰに上がる急登を登る。登り切ったところで、時間や天候を考慮した結果、近くにあった白沢天狗尾根への分岐にデポすることにした。デポした後、Ｃ２に着く頃には天候は回復し、明日の晴天が窺えた。

２２２０ｍのナイフリッジ（写真の手前側）

１２月２８日　晴　－１２℃

Ｃ２（６：４５）～２３８０ｍデポ地点（１０：００）

～２４７０ｍ台地（ＡＣ）（１０：３０）

放射冷却のため昨日より気温がぐっと下がる。Ｃ２出発時は気温が低いものの風は弱かったが、登るにつれて南からの風が強く吹いてくる。昨日の荷上げ時のトレースが他パーティによって踏み固められ、ツボ足で快適に進む。２３８０ｍデポ地点でデポの一部を回収し、さらに３０分ほど登る。降雪直後のため雪が締まっておらず、雪崩を警戒して計画していた２５００ｍまで行かず、手前の広い台地状の場所にＡＣを設営する。テント設営後、岩附と井上と関根で逆ボッカに向かい、残った者は風よけのブロック塀作りをする。４０分程で逆ボッカから戻り、ちょうどその頃にブロック塀も完成する。１４時３０分頃、高野ＯＢが入山される。１５時頃まで天気は比較的穏やかであったが、次第に風が強まり夕食後の１８時頃には目を開けていられないほどの地吹雪となった。夜にはテントの周りに吹き溜まる雪を何度も掻き出した。

１２月２９日　雪　－１２℃

ＡＣ（６：００）～爺ヶ岳（７：００）～冷池山荘（９：００）

～鹿島槍ヶ岳南峰（１１：２０）～冷池山荘（１３：００）～爺ヶ岳（１４：３０）

～ＡＣ（１５：００）

朝から雲がかかり、雪が降っているがあまり風はないため、鹿島槍ヶ岳南峰にアタックする。爺ヶ岳までの登りはワカンを着けて進むが、新雪の深いラッセルとなり体が埋まる。爺ヶ岳中峰周辺の稜線では所々クラストしており、少し歩きやすくなっている。爺ヶ岳から先は東側に雪庇が発達しているため注意して進む。冷池山荘までは下りとなるが、稜線上では西側からの風が強く、樹林帯内では風はないが深いラッセルに苦労しながら進む。冷池山荘からは避難小屋に泊まっていた隊のトレースがあり、順調に進む。布引山を越えると西風が非常に強くなり、その上ガスで視界が悪い。何度かＯＢと上級生で引き返しの判断の相談をし、１１時半に引き返すことを決めて先を急ぐ。クラストした夏道を進み、南峰直下の吹き溜まりのラッセルを超えると、鹿島槍ヶ岳南峰に到着する。制限時間ギリギリの到着だった。急いで写真を撮り、ＡＣへの帰幕を開始する。同じ道を辿るが天気が悪いため慎重に下る。冷池山荘で休憩をとり、爺ヶ岳を越え、一気にＡＣまで下る。ＡＣに着くと町が見渡せる程晴れていた。無事に登頂し、一足先にＳＤの年越しそばを食べた。

アタック後の帰り　信州（東）側に雪庇がある

１２月３０日　晴　－１６℃

２４７０m台地（７：１５）～１７６７m（９：００）～１０００m（１２：００）

昨晩の放射冷却により雪が締まっていたため、ワカンを着けずに出発する。急斜面は足場をしっかりと確認しながら慎重に下る。ナイフリッジのＦｉｘは全員が通過後、岩附、小野寺、関根で回収する。下山途中、年末のためか登山者とよくすれ違う。行きの行程でつけたトレースはしっかりと踏み固められていた。１７６０mでＣ２のデポを回収し、１２５０m急登の手前まで順調に下る。そこからは浅く雪がついていたが、滑りやすい急登であることを考慮し、全員がアイゼンを着ける。岩附、小野寺、井上が先行し危険箇所にＦｉｘを張る。立木に支点をとり、合計２ピッチのＦｉｘを通過した後、１０００m地点に到着する。実際には急登の土は凍りついていたため、アイゼンがよく効き、Ｆｉｘを張るほどではなかった。取り付きで整理体操を行い、冬山合宿を終えた。

鹿島槍ヶ岳南峰にて

左から　西出（ＯＢ）　小島　関根　岩附　井上　橋本　中村　高野（ＯＢ）小林（ＯＢ）

冬山合宿概念図

天狗尾根
八峰キレット
キレット小屋
北峰
鹿島槍ヶ岳
2842m
南峰
2889m
頂上手前が吹き溜まっており
視界が悪い時は分かりにくい。
西風が強い
この辺りはクラストした
夏道が出ている。
東尾根
布引山
2683m
信州側は
雪庇が発達
冷池山荘
赤岩尾根
樹林帯は雪が深く
ラッセルに苦しむ。
西風が強い
冷尾根
丸山
1377m
北峰
2631m
爺ヶ岳
2670m
種池山荘
南峰
2650m
東尾根
1978m
幕営可
ＪＰ
1767m
ＡＣ
2470m付近
ＪＰ
2380m
2198m
ナイフリッジ
1Ｐ40mFixを張る。
Ｃ２
樹林帯で危険
箇所は特にない。
Ｃ１
1476m
矢沢ノ頭
爺ヶ岳直下は雪が
深く、東側に雪庇
が発達している。
南尾根
白沢天狗尾根
鹿島
1331m
取り付きは急登で雪が
無かったため、落ち葉が
滑り登りにくい。
下山時は急坂に２Ｐ80m
Fixを張る。

冬山合宿装備食糧方針・反省

装備

＜登攀用具＞

ザイルはアタック用の雪上用ザイル３本に加えて、緊急時用に９ｍｍ×５０ｍを２本持っていった。また、Ｆｉｘロープは上部のナイフリッジの通過に２本、また、下部に露岩があるという記録があったため１本、さらに予備として１本を加えたため、計４本持っていった。Ｆｉｘバーは１ピッチあたり４本として予備を入れて計１２本（樹林帯の露岩は木で取る)、捨て縄は１ピッチあたり２本として予備を入れて計８本とした。また非常時用の登攀具としてハーケン２枚（内クロモリ製ハーケンを 1 枚、軟鉄製ハーケン１枚）とアングル１本を持っていった。

その結果、Ｆｉｘは上部のナイフリッジに１ピッチ、下山時の滑りやすい急登に２ピッチの計３本使用した。参考記録にあった下部の露岩は雪も少なく問題なく通過できた。今回のルートでは計画通りの本数で適当であった。Ｆｉｘバー、ハーケン、アングルに関してはすべて木で支点が取れたため不要であった。

＜燃料＞

例年の冬山合宿を参考に、行動日、行動予備日の灯油消費量は１人１日１３０ｃｃ、停滞日は１５０ｃｃとし、予備２０％の計算で持っていった。またガス缶についても同様にプレヒート、ランタン用をそれぞれ５日で１個、４５ｇ／日の計算で持っていった。ランタンマントルは予備を含めて４個持っていった。その結果、この計算で特に問題はなかった。

＜その他＞

フラッグは爺ヶ岳のピークに３本、途中の赤岩尾根と冷尾根に誤って降りることのないように目印として各３本、白沢天狗尾根との合流点に３本、Ｆｉｘ箇所に２本、予備４本の計１５本持っていき、本数に問題はなかった。また、今回はプライヤーの代わりにラジオペンチを入れたが、細かい作業がしやすく使いやすかった。

＜個人装備＞

今合宿のルートではアッセンダーを使わなければならない急峻な尾根は出てこないと考え、アッセンダーは緊急時用として上級生のみが持っていった。下級生が使う場合は、上級生が貸し出すことした。また上級生のみアイスハンマーをもっていったが、今回のルートでは、隊で１～２本あれば十分だった。

食糧

＜基本計画＞

例年の冬山合宿を参考にし、１人１日行動日５９０ｇ、行動予備日５７０ｇ、停滞予備日５３０ｇの計算で持っていった。今回は日数が少なかったため、前期中期後期による重量の差をつけずにこの重量で統一し、行動日の食糧は入山からＣ２移動まで、ＡＣ荷上げからＡＣ移動まで、アタックから下山までの３つのセクションに色分けした。そして、Ｄを始めとする１日毎にまとめてパッキングをし、管理をしやすくした。

カロリーは成人の１日摂取カロリーである２４００ｋｃａｌを目指すが、予備日ではこのカロリーに満たないため、足りない分はラードやバターなどで補うようにした。

＜メニュー＞

Ｂ、Ｌ、Ｄに関しては例年通りのメニューで構成した。１２月３１日のＤはＳＤとして「年越しそば」を入れた。また、耐寒合宿の富士山で雑煮が好評でありモチが食べやすかったためＢ２に取り入れた。Ｌに関して小魚ナッツが食べにくいとの意見があったためメニューから外し、好評のグミは今回も取り入れた。Ｍは昨年度の停滞時に非常に好評だったビーフンを入れた。また、メニューで使用するスープ素は基本調味料と同じものではなくあらかじめ調合したものを持っていった。

反省点としては、モチにカビが生えてしまったことが挙げられる。今後はパッキングの前にモチを切るまな板や包丁を消毒するようにしたい。また、Ｂ１の鶏清湯が食べにくいという意見が出たため、今後他のメニューに変更したい。

＜各袋＞

嗜好品はココア、お汁粉、ホイップクリームを持って行った。塩は去年多く余ってしまったため日数を考慮し８０ｇにした。

＜フリーズドライ＞

トマトは昨年度の反省を生かし生ではなくトマト缶を使った。加工後にパウダー状になり使いやすかった。鶏肉は皮を取ってしまうとパサパサして食べにくいため、皮付きのまま加工したところ、味が良かった。

２０１５年度冬山合宿　装備表

品名	数量	単位重量	総重量	合計	備考
～幕営用具～				17,210	
＜EXP6人用テント①＞				7,140	学生、OB用テント
本体	1	3,300	3,300		
外張り	1	2,400	2,400		
ポール	1	1,440	1,440		予備ポール3本
＜EXP6人用テントペグ袋①＞				1,470	
ペグ	30	25	750		プラペグ12本、竹18本
張り綱	3	50	150		
テント箒	1	50	50		
ガムテープ	1	150	150		
缶メタ	1	320	320		
テント拭き	1	50	50		結露取り用
＜EXP6人用テント②＞				7,140	学生テント
本体	1	3,300	3,300		
外張り	1	2,400	2,400		
ポール	1	1,440	1,440		予備ポール３本
＜EXP6人用テントペグ袋②＞				1,460	
ペグ	30	25	750		プラペグ12本、竹18本
張り綱	3	50	150		
テント箒	1	50	50		
ガムテープ	1	150	150		
缶メタ	1	310	310		
テント拭き	1	50	50		結露取り用
～炊事用具～				15,360	
コッフェルセット	1	2,300	2,300		大・中メンツ１２枚入り
コッフェル大	1	1,500	1,500		大　メンツ１０枚入
メンツ	22	80	1,760		1人2枚　予備2枚
底拭き	1	50	50		
ラジウス	2	2,200	4,400		灯油満タン
鍋敷き	2	220	440		
水ポリ	2	195	390		
テルモス	4	485	1,940		1ℓ
やかん	1	1,030	1,030		8ℓ　蓋はブキ袋
雪袋	2	90	180		雪取り用
＜ブキ袋＞				1,370	メンツ5枚入
ブキ	11	30	330		予備1本
やかんの蓋	1	80	80		
ガスカートリッジ（小）	1	380	380		プレヒート用5日で1個
ガスヘッド	1	200	200		
菜ばし	1	40	40		
しゃもじ	1	50	50		黒
おたま	2	55	110		金、プラ

品名	数量	単位重量	総重量	合計	備考
コッフェル掴み	1	50	50		
こし布	1	50	50		
じょうご	1	30	30		
ゴム手袋	1	100	100		厚手
～登攀用具～				21,830	
ザイル8.5mm×50m	2	2,800	5,600		
雪上用ザイル	3	1,500	4,500		
Fixロープ	4	1,900	7,600		
スノーバー	7	345	2,415		カラビナ付
＜スリング・登攀具袋＞				745	
テープ10mm×600mm	5	45	225		
カラビナ	10	30	300		
ハーケン	2	70	140		内 軟鉄製1枚
アングル	1	80	80		
＜捨て縄・Fixバー袋＞				970	
捨て縄	8	65	520		7mm×200cm
Fixバー	12	36	432		竹製　約2.5×22cm
～燃料～				19,776	
灯油（13日分）	9	2,000	17,876		行動130cc 停滞150cc 予備20%
ガスカートリッジ(小)	5	380	1,900		ランタン用、プレヒート用5日で1個　45g／日
～その他～				10,565	
ツェルト	4	530	2,120		3人用
修理具箱	1	1,300	1,300		温度計、電池、マントル3枚入
薬品箱（大）	1	840	840		
薬品（小）	1	290	290		
ラジオ(天気図用紙入り)	1	340	340		天気図用紙48枚入　予備電池1セット
ラジオ	1	190	190		予備電池1セット
デジタルカメラ	1	500	500		予備電池2個
トランシーバー	2	425	850		予備電池1セット入、もう1セットは修理具箱
ランタン	1	280	280		マントル2枚入
LEDランタン	1	380	380		電池3日で1セット
蛍光テープ	7	45	315		上級生、OB分　直径約5cm
デポ袋	3	360	1,080		布製1個　ナイロン製2個
フラッグ	15	80	1,300		
スノーソー	2	270	540		鞘付き
携帯電話（部）	1	240	240		非常時用
合計総重量				86,111	
下山総重量				77,834	

２０１５年度冬山合宿　食糧表

期間	日程	行程	B	L	D	入山OB
1	12月25日	信濃大町～取り付き		L1×8	D1×8	小林
2	12月26日	～1760m　荷上げ	B1×8	L2×8	D2×9	西出　小林
3	12月27日	～１７６０ｍ　移動	B2×9	L3×9	D3×9	西出　小林
4	12月28日	～2500m　荷上げ	B3×9	L4×9	D4×10	高野　西出　小林
5	12月29日	～2500m　移動	B1×10	L1×10	D1×10	高野　西出　小林
6	12月30日	行動予備	B2×10	L2×10	MD1×10	高野　西出　小林
7	12月31日	行動予備	B3×10	L3×10	SD×10	高野　西出　小林
8	1月1日	停滞予備日	B1×10	M1×10	MD2×10	高野　西出　小林
9	1月2日	鹿島槍ヶ岳　アタック	B2×10	L4×10	D2×9	高野　西出　小林
10	1月3日	行動予備日	B3×9	L1×9	MD3×9	西出　小林
11	1月4日	停滞予備日	B1×9	M1×9	MD4×9	西出　小林
12	1月5日	下山	B2×9	L2×9		西出　小林
13	1月6日	行動予備	B3×9	L3×9	D3×9	西出　小林

[基本計画]
成人の一日摂取カロリー2400kcalを目指す
テルモスは26日まで4個以降5個。
砂糖1人1日40g
ミルク1人1日15g
全日程平均重量　　平均1人1日563g
全日程平均カロリー　平均1人1日2347kcal

行動日	1人1日590g	（B：160g　L：210g　D：220g）
行動予備	1人1日570g	（B：160g　L：210g　MD：200g）
停滞予備	1人1日530g	（B：160g　M：170g　MD：200g）

[各袋]

お茶・嗜好品袋
紅茶（テルモス63P、L用112P）
ミルク　1680g
砂糖　4560g
ココア
お汁粉
カスタード
マルチビタミン・ビタミンE各112個

調味料袋
塩
コショウ
七味
コンソメ
中華味
本ダシ
ニンニク
昆布だし
ダシダ
片栗粉
粉生姜
マヨネーズ
ラード
バター
柚子胡椒
乾燥醤油
味覇

乾燥肉袋
乾燥牛肉
乾燥豚肉
乾燥鶏肉
乾燥羊肉
乾燥魚介類
サイコロステーキ

乾燥野菜
乾燥野菜①
ニンジン
パプリカ
タマネギ
乾燥野菜②
インゲン
ミックスベジタブル
カボチャ
サツマイモ
トマト

各袋に配布
α 米
ビーフン
乾燥卵
乾燥味噌汁
春雨
スープ素
シチュールー
カレールー
緑茶・ほうじ茶・麦茶1回
乾燥そば
かき揚げ

乾物袋
乾燥ワカメ
乾燥キクラゲ
乾燥シイタケ
お茶づけ
フリカケ
鰹節

B1:鶏清湯

品名	重量	カロリー	
	g	g当	計
α 米	120	3.9	464.4
スープ素	5	2.4	11.8
乾燥肉	10	6.7	67.3
乾燥野菜	15	4.9	74.0
砂糖	10	3.8	38.4
計	160	–	655.8

B2:雑煮

品名	重量	カロリー	
	g	g当	計
α 米	60	3.9	235.8
モチ	75	2.0	150.0
スープ素	5	1.0	5.0
乾燥野菜	5	4.9	24.7
乾燥肉	5	6.7	33.7
砂糖	10	3.8	38.4
計	160	–	487.5

B3:海鮮雑炊

品名	重量	カロリー	
	g	g当	計
α 米	120	3.9	464.4
スープ素	5	3.4	17.2
乾燥魚介類	13	6.7	87.5
乾燥野菜	5	4.9	24.7
乾燥卵	7	6.7	47.1
砂糖	10	3.8	38.4
計	160	–	679.2

M1:ビーフン

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
ビーフン	130	3.4	442
スープ素	5	2.35	11.75
乾燥野菜	15	4.93	73.95
乾燥肉	10	6.73	67.3
砂糖	10	3.84	38.4
計	170	–	633.4

L1:

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
ロールケーキ	100	4.4	440.0
グミ	40	4.0	160.0
チーズ	30	3.4	101.7
サラミ	20	5.0	100.0
アメ・チョコ	10	4.7	47.0
砂糖	10	3.8	38.4
計	210	–	887.1

L2:

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
カステラ	100	3.2	320.0
煎餅	40	4.3	172.8
魚肉ソーセージ	40	5.0	200.0
アメ・チョコ	20	4.7	94.0
砂糖	10	3.8	38.4
計	210	–	825.2

L3:

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
フルグラ	100	4.5	450.0
グミ	40	4.0	160.0
サラミ	20	5.0	100.0
チーズ	30	3.4	102.0
アメ・チョコ	10	4.7	47.0
砂糖	10	3.8	38.4
計	210	–	897.4

L4:

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
ドーナツ	100	5.4	540.0
クッキー	40	5.0	200.0
柿ピー	40	3.4	136.0
アメ・チョコ	20	4.7	94.0
砂糖	10	3.8	38.4
計	210	–	1008.4

SD:年越しそば

品 目	重量	カロリー	
	g	g当	計
α 米	60	3.9	232.2
乾燥そば	90	4.4	396.0
スープ素	5	2.4	11.8
かき揚げ	30	2.3	70.2
乾燥肉	10	6.7	67.3
乾燥野菜	5	4.9	24.7
砂糖	20	3.8	76.8
計	220	–	878.9

D1:シチュー

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	160	150	3.9	619.2	580.5
シチュールー	30	20	5.3	158.1	105.4
乾燥肉	5	5	6.7	33.7	33.7
乾燥野菜	5	5	4.9	24.7	24.7
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
計	220	200	–	912.4	821.0

D2:キムチ鍋

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	160	150	3.9	619.2	580.5
キムチの素	5	5	2.1	10.5	10.5
乾燥肉	15	10	6.7	101.0	67.3
乾燥野菜	15	15	4.9	74.0	74.0
春雨	5	0	3.8	19.2	0.0
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
計	220	200	–	900.6	809.1

D3:カレー

品名	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	160	150	3.9	619.2	580.5
カレールー	30	25	5.3	158.1	131.8
乾燥肉	5	3	6.7	33.7	20.2
乾燥野菜	5	2	4.9	24.7	9.9
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
計	220	200	–	912.4	819.1

D4:中華丼

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	160	150	3.9	624.0	585.0
スープ素	10	5	2.4	23.5	11.8
乾燥魚介類	10	10	6.7	67.3	67.3
乾燥野菜	10	10	4.9	49.3	49.3
乾燥味噌汁	10	5	3.4	34.3	17.2
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
計	220	200	–	875.2	807.3

８．春山強化合宿

期間：２０１６年２月５日～２月１１日

場所：八ヶ岳　稲子湯～夏沢峠～行者小屋定着～美濃戸口

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
　　４年　岩附正樹
　　２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
　　１年　小島明

行動概要：２月　５日　離京　入山　稲子湯～本沢温泉
　　６日　～夏沢峠
　　７日　～行者小屋（ＢＣ）　雪上訓練
　　８日　登攀（赤岳主稜、中山尾根）
　　９日　ジョウゴ沢
　　１０日　登攀（石尊稜、小同心クラック）
　　１１日　行者小屋～美濃戸口　下山

２月５日　晴
　稲子湯ゲート（１１：４０）～しらびそ小屋（１３：３０）
　　～本沢温泉キャンプ場（１４：４５）
　松原湖駅からタクシーで稲子湯先のゲートまで向かい、ゲートから樹林帯の夏道に沿った道を行く。天気は良く、固く締まったトレースもあり、ツボ足でも歩きやすい。平坦地を屏風橋まで行き、沢を左手に見ながら登って行く。急登が終わり、傾斜が緩やかになってくると、しらびそ小屋に到着する。ミドリ池は氷が張っていた。中山峠の分岐を本沢温泉方面へと進む。ここからまた平坦地が続き、根石岳からの尾根をトラバース気味に越え、沢沿いに緩やかな道を進むと本沢温泉キャンプ場に到着した。本沢温泉のキャンプ場では我々のテント２張りのほかに３張りほど張れるスペースがあった。キャンプ場付近の小川で水を汲むことができたため、融雪の必要はなかった。

２月６日　雪　－８℃
　本沢温泉キャンプ場（６：３０）～夏沢峠（７：５０）
　本沢温泉キャンプ場から野天風呂の分岐を通過する。昨日と同様にしっかりとしたトレースがある。雪が降っているが、積もるほどではない。雪原を抜け、樹林帯の中の九十九

折りの斜面を登って行き、斜面に沿って進んでいく。夏沢峠に到着した時点で風が強まってきた。１時間天気待ちをするが、硫黄岳がホワイトアウトで見えないため、本日は停滞とする。嗜好品のお汁粉を作り、明日への英気を養った。ここでは水を汲むことができないので融雪を行なった。

２月７日　快晴　－１８℃

夏沢峠（７：０５）～硫黄岳（８：１０）～赤岳鉱泉（９：０５）
～行者小屋（ＢＣ）（１０：００）～雪上訓練（１１：００）～ＢＣ（１２：１０）

朝の天気は風がなく穏やかだった。夏沢峠から硫黄岳への樹林帯を登っていく。森林限界を越えた硫黄岳の稜線では風が強かったが硫黄岳を越えたところから風は止み、晴れ間が見えた。硫黄岳から赤岩の頭まで緩やかに下り、そこから一気に九十九折りの道を下ると赤岳鉱泉に到着する。休日のため多数の一般登山者とすれ違った。この頃には天気は回復し、暑いくらいになっていた。そこから中山乗越を越え、行者小屋に到着する。行者小屋は大勢の人で賑わっていた。ＢＣ設営後、ＢＣの下の斜面で埋没訓練と埋没者捜索訓練を行い、雪崩遭遇時の対応を再確認した。

２月８日　晴　－２０℃

＊中山尾根パーティ　井上（２）＝小島（１）＝小野寺（４）

ＢＣ（６：００）～中山尾根取り付き（６：４０）～登攀開始（７：２０）
～登攀終了（１４：５０）～ＢＣ（１５：３０）

ＢＣから中山乗越まで登り、そこから中山尾根を下部岩壁の取り付きまで向かう。樹林帯の中を縫うようにトレースがありラッセルの必要はない。傾斜は次第に急になっていき、樹林帯を抜けて平らになった場所でアイゼンと登攀具を着ける。そこから取り付きまでは細い尾根を少し登る。風は強くなく、岩壁にはあまり雪が付いていなかった。全ピッチ井上がリードをした。

１ピッチ目　下部岩壁下のハンガーボルトと残置ハーケンで支点を取り登攀を開始する。岩壁下には支点が少ないため本来は一段下の潅木で取るのが良い。下部岩壁沿いに右下へトラバースして凹角を左上する。一段登った後の右側の狭い凹角は難しいため左に巻いて大岩を乗越し、傾斜の緩い斜面を登るとテラスに着く。ハンガーボルト２個で支点を取り３０ｍでピッチを切る。少し奥にも支点があり、そこでもピッチを切ることができる。

２ピッチ目　支点から左に５ｍ程トラバースし、急な草付きを登る。雪付きが悪く、アイスハンマーも利きにくいため木を掴んで登る。登り過ぎると声が届かなくなるため、２５ｍでピッチを切る。

３～

４ピッチ目　木で支点を取りながら潅木と岩混じりの雪稜を登る。

５ピッチ目　上部岩壁基部まで１０ｍザイルを出す。新しいハンガーボルトでピッチを切る。

６ピッチ目　右側の急な凹角を登る。凹角にはホールド、スタンスはあるが細かいためＡ０を交えて慎重に登る。凹角の抜け口は少し被っているため難しい。スタンスはしっかりしているためよく見てから乗り越す。上がり切った所のハンガーボルトで支点を取り２５ｍでピッチを切る。

７ピッチ目　簡単な雪稜を登る。支点は潅木で取ることができる。４５ｍザイルを出し、ピッチを切る。

８ピッチ目　稜上を忠実にピナクルまで行き、そこからから左に巻くように簡単な岩場を登る。登り切るとトサカ状岩壁の基部に着き、ハンガーボルトでピッチを切る。

９ピッチ目　明瞭なバンドをトラバースし縦走路に合流した所でピッチを切る。途中のピナクルで支点を取り、ザイルの流れが悪くならないようにする。ここで中山尾根の登攀を終了する。

赤岳方面の縦走路を辿り地蔵尾根を下ってＢＣへ帰幕する。地蔵尾根の上部は急だが明瞭なトレースがあり、天気も穏やかであったためあまり怖くはない。樹林帯に入るまではハシゴ場とクサリ場があり慎重に下る。樹林帯に入り、アイゼンを外してＢＣまで一気に駆け下る。

＊赤岳主稜パーティ　関根（２）＝中村（２）＝岩附（４）

ＢＣ（６：０５）～取り付き（７：０５）～登攀開始（７：３０）

～終了点（１１：４０）～赤岳頂上山荘（１２：０５）ＢＣ（１３：００）

朝からよく晴れており稜線が見える。ＢＣから文三郎道に向けて出発する。文三郎道の樹林帯を抜ける手前でアイゼンとハーネスを着ける。傾斜は次第にきつくなるがトレースがしっかりあるため歩きやすい。文三郎道の途中から赤岳沢へと進み、岩混じりの雪面をトラバースして取り付きへと向かう。取り付きには単独の登攀者がいたため登攀の準備をして待機する。関根が全ピッチリードした。

１ピッチ目　取り付き正面にある顕著なチョックストーンのあるチムニーを登る。スタンスはあるがホールドがない。傾斜が強く左側のフェースから回り込むように登る。回り込む際はホールドが乏しかったため残置スリングを使用した。その後は、簡単な岩と雪のミックスした斜面となる。上部のフェース手前にあるテラスまで右上して３０ｍでピッチを切った。チョックストーンを乗越す際はアイスハンマーを使うべきであった。終了点はハンガーボルトで支点が取れる。

２ピッチ目　左側へとトラバースし、フェースを登る。フェースを登り切ると、潅木交じりの雪稜となる。ルートを間違え稜線の南側に回り込んでしまったため、ザ

イルの流れが悪くなり、途中の残置ハーケンを使用してピッチを切る。

３ピッチ目　緩やかな岩混じりの雪稜が続く。２ピッチ目のミスがあり支点が取れず、ザイルを一杯に伸ばしハンガーボルト１つで支点を取ってしまった。５０ｍでピッチを切った。

４ピッチ目　雪稜を進み、途中の露岩のハーケンで支点を取り４０ｍ程でピッチを切る。ここで後続のパーティに追い付かれる。

５ピッチ目　雪稜を登り、上部岩壁基部まで進みハンガーボルトで支点を取った。上部岩壁の取り付きは、正面のフェースを登るのではなく右側を回り込むように登る方が簡単であり、どちらにもハンガーボルトがあるため間違えないように注意する。２０ｍ程でピッチを切った。

６ピッチ目　核心部の岩壁登攀となる。正面にある階段上の凹角を登り、岩と氷の易しいミックス斜面になる。稜通しに行きチムニー内に入り、体を潜り込ませて抜ける。高度感があり緊張する。すぐ上のハンガーボルトで支点を取り４０ｍでピッチを切る。

７ピッチ目　雪稜から岩稜を登るが次第に傾斜が増してくる。４０ｍ程でピッチを切る。

８ピッチ目　稜上を目の前のチムニーを目指して登る。チムニーは急に見えるがホールド、スタンス共に豊富にあり問題ない。赤岳の肩に出る手前の広い斜面にて、大岩で支点を取り４０ｍでピッチを切り、ここで登攀を終了する。

赤岳の肩まで進み、ここで縦走路と合流する。赤岳頂上山荘からは権現岳方面の縦走路に合流し、文三郎尾根から下る。樹林帯に入る手前でアイゼンを外しＢＣまで一気に下る。

２月９日　雪　－１４℃

ＢＣ（６：５０）～ジョウゴ沢Ｆ１（７：２０）～ジョウゴ沢Ｆ２（８：０５）～ＢＣ（１２：００）

早朝から積雪があり風も強かったため、１時間天気待ちをする。稜上にガスが掛かり、天気の回復が見込めないためジョウゴ沢でアイスクライミングをすることにした。

ＢＣを出発しジョウゴ沢に向かう。大同心、裏同心ルンゼの概念を確認しながら進む。ジョウゴ沢入り口にはロープが張ってあり、看板もある。トレースを辿り、平坦な沢沿いを進むとＦ１に到着する。ここでアイゼン、登攀具を着ける。Ｆ１にてアイスクライミングの講習を行う。アックスの使い方、アイススクリューの場合の支点構築などを確認した。氷が少なく階段状になっていた。一人数回登る練習をして上部のＦ２に移動する。Ｆ２も例年よりも氷が張っておらず、滝の奥で水が流れているのが確認できた。正面にトップロープを１本張り、氷壁を登り込む。一通り登攀を終えたところで乙女の滝、Ｆ４へと進む。しかしこのあたりから天気が悪化してきたため引き返す。Ｆ２を懸垂下降して再度、トップロープを張りアイススクリューで支点を取りながらリードの練習をした。その後ＢＣへ走って帰幕した。この日は１日中非常に天気が悪かった。

２月１０日　晴　－１５℃

＊小同心クラックパーティ

井上（２）＝小島（１）＝小野寺（４）

ＢＣ（７：００）～取り付き（９：００）～登攀開始（９：３０）

～登攀終了（１４：００）～ＢＣ（１５：２０）

朝雪が降っていたため、食当を１時間遅らせるが、その後天気が回復してきたため、登攀に出発する。

大同心沢を２４００m付近まで詰めていき途中から大同心稜の樹林帯を登る。稜線までの急登が前日の降雪でラッセルとなっていたため登りにくい。樹林帯の終わる少し手前で傾斜がさらに急になったためアイゼンと登攀具を着ける。大同心基部より小同心に向かってトラバースする。雪崩れそうな斜面を慎重に進み、小同心基部の取り付きまで行く。全ピッチ井上がリードする。

１ピッチ目　左に見える顕著な凹角を左上する。ホールド、スタンスはしっかりしている。４０m程ザイルを伸ばす予定であったが流れが悪くなりそうだったので２０mでピッチを切る。

２ピッチ目　１ピッチ目の続きの凹角を登る。カムやピナクルで支点を取りながら２０m程登り、ピッチを切る。

３ピッチ目　テラスから右のチムニーを登る。チムニーはホールド、スタンス共に豊富だが前日の降雪で雪が被っており掘り出しながら登る。２０m程で一度チムニーから抜け、その後右側の狭いチムニーを１０m程登り、抜けた先の小同心の肩でピッチを切る。

４ピッチ目　小同心の頭まで登る。雪面を５m程トラバースして少し上がり、そこからは階段状の岩場を登る。稜上手前のハンガーボルトで支点を取り登攀を終了した。

横岳の頂上直下まではトレースを進む。横岳に登らずに岩壁基部を赤岳側へトラバースして、クラストした草付きの斜面を登り縦走路へ合流した。時間が押していたため地蔵尾根よりＢＣへ戻ることにする。途中雪崩れそうな斜面のトラバースもあり慎重に通過する。地蔵尾根は一昨日と同様トレースがしっかりとある。樹林帯の手前でアイゼンを外し一気に駆け下った。

＊石尊稜パーティ　関根（２）＝中村（２）＝岩附（４）

ＢＣ（７：００）～登攀開始（８：４５）～登攀終了（１３：１５）～ＢＣ（１４：３５）

ＢＣから中山乗越まで少し登り、樹林帯の九十九折りの道を駆け下る。その後沢を渡る橋の手前から、樹林帯の平坦地に入り横岳西面に向かって沢沿いに詰めていく。昨晩までの降雪は２０～３０ｃmあり、トレースが薄っすら確認できる程度である。そのため膝下程度のラッセルをしながら進むが潅木が頻繁に生えており、枝が引っかかって煩わしい。

右岸側の小同心ルンゼ、三叉峰ルンゼの分岐を通過し、鉾岳ルンゼに移って左側の石尊稜に続くリッジを登る。沢筋は降雪のため雪崩れそうであった。しかしリッジも雪付きが悪く登り辛かった。樹林帯の稜線を登り切り視界が開けたところで、下部岩壁の取り付きに着く。取り付きにはハンガーボルトの支点はあるが、傾斜がきつく雪質も軟らかく不安定であった。そのため、ピッケルを使って整地したが、少し下がって木の生えた場所で登攀準備するべきであった。ここでアイゼンと登攀具を着け、登攀を開始する。１～２ピッチ目、１０～１２ピッチ目、は関根がリードし、３～９ピッチ目は最初に中村がリードし、その後ツルベで登った。

１ピッチ目　取り付き正面から岩壁を直上する。スタンスはあるがホールドが細かいため難しく感じる。さらに降雪で雪が付き、登るのに苦労する。途中から上部の木に向かって左上しながら登り、短い雪稜を登り切った先にある上部の潅木でピッチを切る。

２ピッチ目　急なヤセ尾根の雪稜を登って行く。西側が切れ落ちているため少し高度感があるが、樹林帯の中であるためそれほど危険ではない。潅木を使って５０ｍでピッチを切る。その後コンティニュアスをしながら簡単な雪稜を１００ｍ程進む。

３ピッチ目　途中に大きな露岩が現れ、傾斜がきつくなってきたため再び登攀を開始する。露岩を右側から左に回り込みながら通過する。１５ｍ程進んだところで潅木を使ってピッチを切る。

４ピッチ目　５０ｍ程簡単な雪稜を進む。支点は潅木で取る。

５ピッチ目　次第に疎林帯となり、視界が開けてくるとナイフリッジが現れる。ナイフリッジの終わりでハイマツを掘り起し、５０ｍでピッチを切る。

６ピッチ目　簡単な雪稜を５０ｍ程進み、潅木で支点を取る。

７ピッチ目　急な雪面を越えて傾斜の緩やかな簡単な雪稜を進むが、ザイル一杯まで進むと丁度良い支点が見つからなかったため少し戻り４０ｍ程登ったところの木を支点にし、ピッチを切る。

８ピッチ目　簡単な雪稜を進むが、奥にナイフリッジと急な斜面が見え、ザイルの長さを考慮して２５ｍ程でピッチを切る。

９ピッチ目　５ｍ程のナイフリッジを越え、岩が露出した急な雪面を左から巻いて進み、２５ｍ程で潅木を使ってピッチを切る。２０ｍ程登ったところの上部岩壁取り付き手前でピッチを切る。支点はピナクルとハンガーボルトで取った。

１０ピッチ目　ここから上部岩壁の登攀となる。他の登山者のパーティと合流するが、関根がリードで先に進む。最初の凹角は正面から登る。凹角を抜けたところは切り立っており、高度感があって怖い。さらに階段状の岩場を登り１５ｍ程でピッチを切る。

１１ピッチ目　上部岩壁の取り付きまで２５ｍ程雪稜を進み、取り付きの凹角脇のハンガ

ーボルトでピッチを切る。

１２ピッチ目　岩混じりの雪稜を稜線に向かってさらに詰めていく。登り切ると広い雪面となる。岩で支点を取り４０m程でピッチを切りここを終了点とする。

ここからクラストした雪稜を１０m程登り、稜上に出る。稜上は晴れてはいるが、風が強い。登攀終了後、風の避けられる岩陰で小休憩を挟んでから縦走路と合流する。縦走路に合流した後は赤岳方面に向かって登山道を進む。途中雪崩れそうな斜面があったため、トラバースの際は１人ずつ通過した。地蔵尾根を下り、５m程の階段を通過した後樹林帯に入る手前の雪面でアイゼンを外してＢＣまで走って帰幕した。

２月１１日　晴　－１５℃

ＢＣ（６：４０）～美濃戸山荘（７：５０）～美濃戸口（８：５０）

今日は朝から晴れており、絶好の下山日和である。朝食後すばやくテントを撤収しパッキングをして下山を開始する。平坦地の樹林帯を進むが、トレースがしっかりできており、ラッセルもなく順調に進む。沢筋に沿って下っていくが、すこし進んだところで沢が凍りつき滑りやすくなっていて歩きづらかった。転倒しないよう注意して慎重に進む。すれ違う登山者も多かったため、ぶつからないように配慮して進む。美濃戸口山荘の手前の道は岩や土がむき出しになっていた。美濃戸山荘からは舗装された車道を駆け下る。ここも道に氷が張っており、転倒しやすくなっていた。美濃戸口まで全力で走り切り、皆で整理体操をして春山強化合宿を終えた。

小同心クラック３ピッチ目の凹角を登る小島

９．春山合宿

期間：２０１６年3月４日～３月１１日

場所：北アルプス　裏銀座縦走　ブナ立尾根～槍ヶ岳～新穂高温泉

参加メンバー：ＣＬ　小野寺央峻
４年　岩附正樹
２年　井上峻太郎　関根孝高　中村慶乃
１年　小島明

行動概要：３月　３日　離京　新宿西口高速バスターミナル（２３時発）
４日　信濃大町駅～葛温泉
入山　葛温泉～ブナ立尾根１９５０ｍ台地
５日　～烏帽子小屋
６日　～野口五郎小屋
７日　停滞
８日　～三俣山荘
９日　停滞
１０日　～槍ヶ岳山荘
１１日　～新穂高温泉　下山

３月４日　晴
葛温泉冬期ゲート（６：２５）～七倉山荘（７：００）～濁沢キャンプ場（８：４５）
～ブナ立尾根取り付き（９：００）～Ｆｉｘ地点（１２：４５）
～１９５０ｍ地点台地（１４：１５）

前日に深夜バスで新宿西口バスターミナルから信濃大町駅まで行き、駅からタクシーに乗り換え葛温泉の冬期ゲート前まで行く。準備体操をした後、行動を開始する。天気はよく晴れていた。冬期ゲートから先は除雪がしてあり、アスファルトの上を進む。いくつかのスノーシェッドと七倉トンネルを越えると七倉ダムが左手に見える。例年より雪が少ないようである。七倉山荘から山の神トンネルを進み、しばらくすると高瀬ダムが見えてくる。高瀬ダムの九十九折りの車道を登り、湯俣との分岐をブナ立尾根方面に進む。すぐ先にあるトンネルと濁の橋を越えると濁沢キャンプ場の広い雪原が広がっていた。ここに幕営する計画であったが、時間と隊の状態を見て先に進むこととする。ここでスパッツとオーバー手袋を着ける。天気が良く、日差しもあって暑いほどであった。橋を渡った目の前

の斜面に赤テープがあり、そこから尾根に取り付いたが、後に取り付きを間違えていたことが分かった。樹林帯の急登の雪は膝下位であったが、良く締まっていたため、ワカンを着ける必要はなかった。１８００m付近で通過が難しい斜面が出てきたため、ここで１ピッチＦｉｘを張る。この日は２２０９mのピークに到達するのは難しいと判断し、１９５０mの平坦地に幕営した。幕営後、地形図で確認してみると、どうやら夏道の尾根とは違う尾根を登っていたことが判明した。明日の行動をよく確認し、就寝した。

３月５日　雪のち晴　－３℃

１９５０m地点台地（５：４５）～烏帽子小屋（１０：３０）

１９５０m地点から２２０８mのピークを目指して進む。雪が降っているが積もるほどではない。今日はワカンとスパッツ、オーバー手袋、毛手袋を着けて行動する。雪はサラサラしていて登り辛い。急登を登りきると２２０９mのピークに到着する。少し進んだ所の２２５０mのタヌキ岩は雪が付いており、北から巻くことができた。２３００mの細いナイフリッジを慎重に通過し、主稜線を目指して登って行く。この頃には雪は止み、膝下ほどのラッセルとなる。主稜線に上がるとクラストしていた。周辺に潅木があり少し下ったところの烏帽子小屋の西側の脇に幕営した。

３月６日　晴のち曇　－３℃

烏帽子小屋（５：３０）～２６１６mピーク先のコル（６：３０）

～２７９２mピーク手前のコル（７：５０）～野口五郎小屋（９：００）

今朝も星がよく見え晴れており、風も穏やかである。すばやくテントを撤収し、烏帽子小屋を出発する。烏帽子小屋先の稜線は二重稜線になっており、夏道に沿って行くと厳しいため、主稜線上を忠実に行く。樹林帯を越えるまでは膝下程度のラッセルがあるが、辛くはない。２６１６mピークから三ッ岳直下までは、強風で雪が飛ばされて地面が露出しており、夏道がはっきりと分かるため、できる限り夏道を歩く。その後三ッ岳に向けてクラストした斜面を緩やかに登る。三ッ岳に着くと風を遮る稜線がなくなったためか、西風がかなり強まった。三ッ岳を下った先は、夏道のトラバースも行けそうではあったが、稜線上を忠実に行くことにする。アイゼンを常に斜面に効かせて歩かないといけないため足が痛くなった。２７９２m手前のコルにて再び休憩を取る。ここは積雪が少なく、砂利がむき出しになっていた。２７９２mから先は、途中夏道が見られたが基本的には稜上の西側を巻くか、稜上に忠実に進む。ほとんどクラストしており、稜線の幅も広いため、危険箇所はなく先行はガンガン進む。小ピークが見えてから少し下ると野口五郎小屋に到着する。小屋付近は完全にクラストしていた。さらに風もかなり強まっていたためテント設営は断念し、冬季小屋を利用することにする。小屋の中も寒いが風は凌げるため快適であった。この日の午後から天候は悪化し、外は吹雪となっていた。

３月７日　曇　－４℃

停滞

昨日の強風は今朝には無く大分落ち着いていたが、ガスが掛かっているため視界が悪い。日の出の時間まで天気待ちをする。７時３０分に外の様子を見るが依然として視界が無い。８時３０分に再び外の様子を見るが天候が回復しないためこの日は停滞とする。１１時に停滞食のすいとんを食べる。時々天気の様子を窺うが日没まで日差しは見られなかった。各自昨日までの疲れを取り、良い休息日となった。

３月８日　晴　－６℃

野口五郎小屋（５：２０）～野口五郎岳（５：３０）～東沢乗越（６：５０）
～水晶小屋（７：４０）～鷲羽岳（９：２０）～三俣山荘（１０：１０）

朝には前日のガスが晴れていた。また、西からの風は強いものの気温はあまり下がらなかった。緩やかなクラストした斜面を登るとすぐに野口五郎岳に到着する。野口五郎岳は、ピークを巻く夏道も露出しており通ることもできた。そこから、稜線上ではなく、夏道に沿ってトラバースし、真砂岳を巻いて通過する。夏道が所々見えるクラスト斜面を進む。真砂岳を通過すると、水晶岳の稜線に遮られたためか風が弱まる。ここから先も所々夏道が見える稜線上を行くが、南側に小規模な雪庇があるため注意しながら進む。東沢乗越から先は懸念されていた岩稜帯であったが、想定していた以上に雪が付いていた。そのためザイルを出さないで通過することにする。稜線の南側は切れ落ちているため、基本的に北側を通過する。岩峰を巻くため、急斜面をトラバースした時は緊張したが、慎重に足を置いて行けば問題はない。最後の岩峰のトラバースを終え、水晶小屋までの急登を一気に登る。水晶小屋に予定より早く到着し、天候も崩れそうではなかったため三俣山荘まで進むことにする。水晶小屋から先で再び風が強まり、ガスで視界が悪くなる。２８４１ｍのピーク手前は尾根が広く道を誤らないようコンパスで方角を確認しながら慎重に進む。２８４１ｍピークを越えてからは夏道が出ており、夏道を辿りワリモ岳頂上に向かう。ワリモ岳手前は西側がクラストした急斜面になっており慎重にトラバースする。ワリモ岳の下り始めは、急な雪面であったため注意して通過する。鷲羽岳までは尾根上を忠実に進む。鷲羽岳から先は頂上直下が急で痩せているため慎重に下る。次第に傾斜は緩くなり、九十九折りの夏道がはっきりと分かる。三俣山荘付近は夏道より北西側のクラストしたハイマツの上を歩く。三俣山荘に着く頃には再びガスが晴れてきた。三俣山荘の冬季小屋はほとんど埋没していた。山荘の三俣蓮華側は強風のため鷲羽岳側に幕営する。天候の悪化を懸念し、ブロックを北側に積み立てる。夕方から天候が悪化し、風雪が強まった。

３月９日　雪　－４℃

停滞

風雪が激しかったため、朝食を１時間遅らせる。朝食後も好天を待つが、風雪が弱まらないため停滞とする。雪がテントの周りに吹き溜まり、頻繁にテントラッセルをする。夜の間も風が強かったが雪は次第に弱まってきた。

三俣山荘周辺

３月１０日　晴のち曇　－８℃

三俣山荘（６：３０）～三俣蓮華岳（７：３０）～双六岳（８：４０）
～双六小屋（９：１０）～左俣乗越（１１：３０）～千丈沢乗越（１３：４５）
～槍ヶ岳山荘（１５：５０）

朝から風はあるが星空がよく見える。テントを撤収し、三俣山荘を出発する。三俣蓮華岳まではほとんどクラストしているが、所々吹き溜まった場所を通過する。ラッセルも少なく快適に進む。三俣蓮華岳直下の急登は膝下程のラッセルとなるが雪が締まっているため登りやすい。ここから双六岳までの稜上はクラストしていてサクサク進む。双六岳辺りで西側の空に雲が出てきて風が強まってくる。山頂から双六小屋までは夏道と同じように進む。下りは雪が深いが適度に締まり、駆け下っても足に負担のかからない下りやすい斜面である。雪の状態が悪いと雪崩が起きそうな斜面であるため注意が必要である。双六小屋は夏の風景とあまり変わりなく、風も弱く快適で最高の幕営地である。弓折岳への稜線はなだらかで岩もあまり見えていなく下りやすそうな稜線であった。

樅沢岳までは夏道から次第にクラスト斜面となった。稜上は南風が強く時々右手で頬を押さえる。硫黄乗越までは稜線の南側斜面をトラバースするように進む。アップダウンが多く、長時間南側の急傾斜にアイゼンを効かせるため足が痛くなる。西鎌尾根の北側は切れていて所々雪庇がある。しばらく進むと硫黄乗越に着く。硫黄乗越は広く幕営が可能であったが風が良く通り、また時間もあったため１５時過ぎに槍ヶ岳山荘に着くのを目標に出発する。千丈沢乗越まではクサリ場が多数出てくる。所々南側斜面に岩肌が出ているところがあり、状況を見て稜上を進んでいく。風は段々と強くなり、ガスに覆われて槍ヶ岳も見えなくなってきた。メンバーも疲労してきて集中力を切らすと落ちてしまいそうな緊張感がある。千丈沢乗越手前の風の当たらない少し広くなったところで休憩する。整地すればテントが張れそうだがすぐ北側が切れていて少し怖い。ここから槍の肩までが最後の急登となる。しばらく進むと完全にガスが掛かり先のルートが見えなくなっていく。南風もかなり強くなり、風に混じって飛んでくる氷粒で顔が痛む。同じように稜線に沿って南側をトラバースして行く。クラストも硬く、たまにある吹き溜まりがいやらしい。ザイルを出すか判断が難しい斜面だが、急斜面でザックも下ろしにくく、また時間もないためそのまま慎重に通過する。１年生の下には４年生がガッチリ付く。途中の大岩は大きく南側に巻いて通過し、再び稜上に向かって登っていく。夏道は全く出ていない。肩への上がり口は稜線を北側に乗越すがガスが濃く見えにくい。夏に通っていなかったら分からなかったと思われる。肩に上がるとすぐに冬期小屋入口がある。山荘周辺は狭く、テントを張れそうな場所は強風を直に受けていた。また、風が避けられる場所は吹き溜まりが氷化しており、整地に時間が掛かりそうであった。さらに天気も悪く疲労していたため冬期小屋に避難することにする。皆疲れ切っていたため、甘いミルクティーで疲れを癒した。

３月１１日　晴　－１８℃

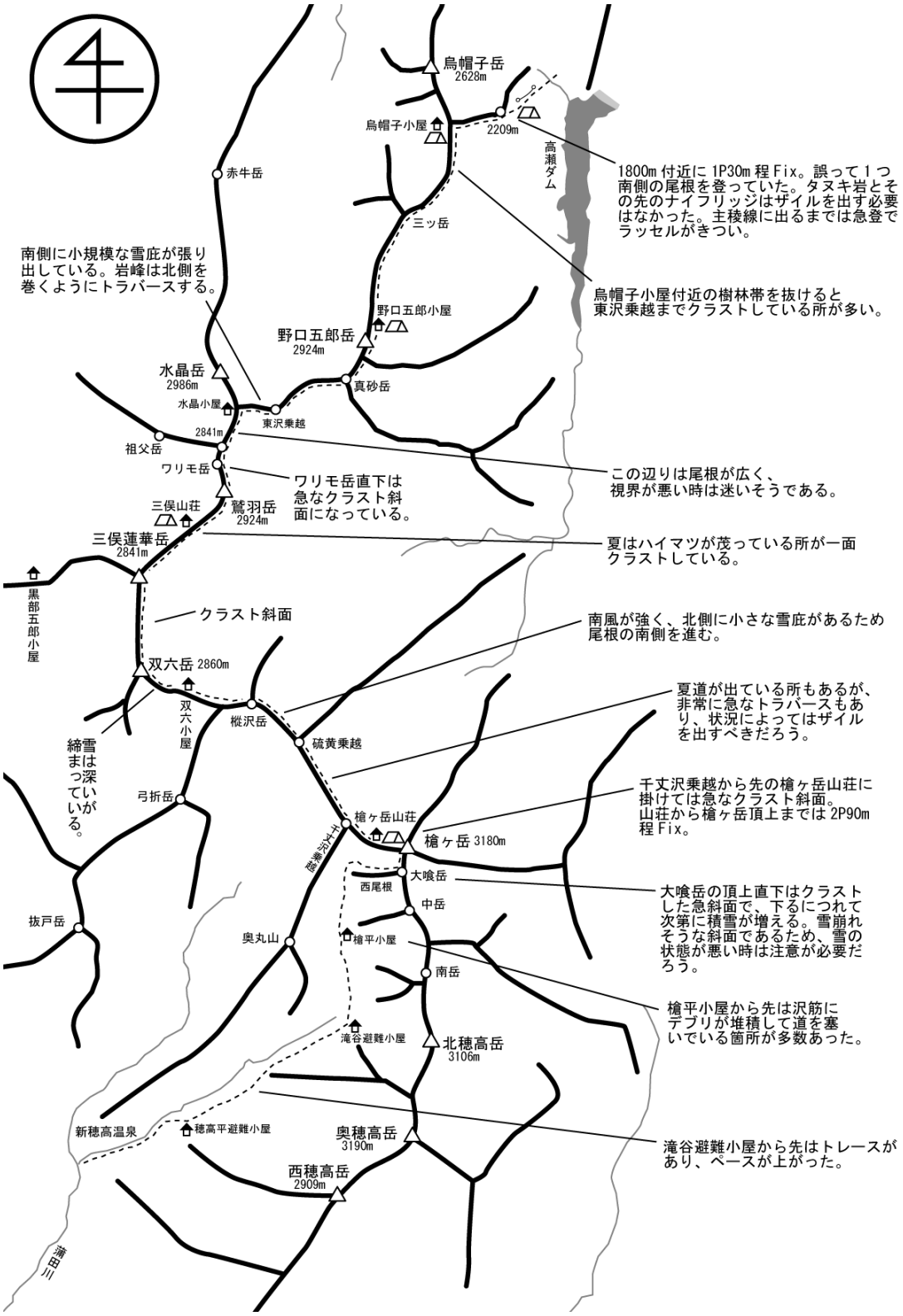
槍ヶ岳山荘（６：２０）～槍ヶ岳山頂（７：５０）～大喰岳（９：２０）
～槍平小屋（１１：５０）～滝谷避難小屋（１２：３０）～白出沢出合（１３：４５）
～穂高平避難小屋（１４：３０）～新穂高温泉（１５：１０）

昨日までの悪天が嘘のように朝から無風快晴である。すばやく準備をして槍ヶ岳のアタックに向かう。岩附、関根が先行して頂上へのＦｉｘを張りに行き、その後、他の者が向かう。頂上までは積雪が多く、クサリがほとんど埋まっている。クラストした雪面にアイゼンをしっかり効かせてＦｉｘを２ピッチ通過して進む。頂上までのハシゴ場は高度感があって緊張した。頂上も無風快晴であり、遠くに剱岳まで見える。皆で記念撮影をして再び来た道を戻る。Ｆｉｘの回収は岩附が行った。Ｆｉｘ箇所はクライムダウンでアイゼンの爪とピッケルのピックをしっかり効かせて慎重に降りる。Ｆｉｘの終了点から取り付きまでの下りはクラストしており滑落の危険があったため、懸垂下降で下る。全員が槍ヶ岳山荘に着いてから少し休憩を取る。天気も良いので、このまま槍平まで下ることにする。大喰岳手前までは、クラストした急雪面であり、慎重に登って行く。大喰岳のピークから

は顕著な西側の稜線へ進む。下り始めは傾斜が強くクラストしているため滑落に注意して慎重に下りる。２６００m辺りから積雪が多くなり、ラッセルしながら下降する。ここから森林限界に入るまでガンガン下っていく。大喰沢から飛騨沢の方へトラバースする際に雪崩そうな斜面の直下を進む。飛騨沢に移り、樹林帯に入る頃には気温はぐんと上がり暑く感じられる。下りはラッセルであるが雪質が軟らかいので辛さは感じられない。平坦地になってから、小休憩を取る。ここでアイゼンからワカンに履き替え、槍平小屋まで進む。槍平小屋付近のルンゼは雪崩れた跡があった。槍平小屋に到着した時点で、時間に余裕があったため、さらに下ることにする。槍平小屋から滝谷避難小屋までは緩やかなアップダウンを交代でラッセルして進む。トレースが見られたため道は分かりやすい。滝谷避難小屋まで順調に進むことができたため、皆ここから下山に向けて気合を入れる。滝谷避難小屋から白出沢出合までもラッセルは無く、トレースを辿ってガンガン進む。白出沢出合から新穂高温泉まではほとんど弾丸道路であり、一気に進む。新穂高温泉まで最後の力を出し切り全力で進む。バス停の手前で整理体操をし、８日間の濃密な合宿を終えた。

槍ヶ岳頂上にて　左から　関根　井上　岩附　小島　中村

春山合宿概念図


烏帽子岳
2628m
烏帽子小屋
2209m
高瀬ダム
1800m付近に1P30m程Fix。誤って1つ南側の尾根を登っていた。タヌキ岩とその先のナイフリッジはザイルを出す必要はなかった。主稜線に出るまでは急登でラッセルがきつい。
赤牛岳
三ッ岳
南側に小規模な雪庇が張り出している。岩峰は北側を巻くようにトラバースする。
烏帽子小屋付近の樹林帯を抜けると東沢乗越までクラストしている所が多い。
野口五郎小屋
野口五郎岳
2924m
水晶岳
2986m
真砂岳
水晶小屋
東沢乗越
2841m
祖父岳
ワリモ岳
この辺りは尾根が広く、視界が悪い時は迷いそうである。
ワリモ岳直下は急なクラスト斜面になっている。
三俣山荘
鷲羽岳
2924m
三俣蓮華岳
2841m
夏はハイマツが茂っている所が一面クラストしている。
黒部五郎小屋
クラスト斜面
南風が強く、北側に小さな雪庇があるため尾根の南側を進む。
双六岳 2860m
双六小屋
樅沢岳
硫黄乗越
夏道が出ている所もあるが、非常に急なトラバースもあり、状況によってはザイルを出すべきだろう。
雪は深いがしまっている。
弓折岳
千丈沢乗越から先の槍ヶ岳山荘に掛けては急なクラスト斜面。山荘から槍ヶ岳頂上までは2P90m程Fix。
槍ヶ岳山荘
槍ヶ岳 3180m
千丈沢乗越
大喰岳
西尾根
大喰岳の頂上直下はクラストした急斜面で、下るにつれて次第に積雪が増える。雪崩れそうな斜面であるため、雪の状態が悪い時は注意が必要だろう。
中岳
抜戸岳
奥丸山
槍平小屋
南岳
槍平小屋から先は沢筋にデブリが堆積して道を塞いでいる箇所が多数あった。
滝谷避難小屋
北穂高岳
3106m
新穂高温泉
穂高平避難小屋
奥穂高岳
3190m
滝谷避難小屋から先はトレースがあり、ペースが上がった。
西穂高岳
2909m
三田川

春山合宿装備食糧方針・反省

装備

今回の合宿は縦走形式であるため、団体装備と個人装備を共に軽量化して重量削減を目指した。

＜幕営用具＞

ＥＸＰ６人用テントを１張持っていった。６人パーティであり、生活空間を広げるために登攀具等の個人装備はデポ袋に入れて外で保管した。その結果、食料をデポ袋にまとめて前室とフライの間に、２人分の個人装備を後室とフライの間に保管して使用すれば十分なスペースが確保できて生活できる。

＜炊事用具＞

ラジウスの代わりとして分離式ガスヘッドを２個持っていった。また予備のガスヘッドを１個持っていく。今回は人数が少ないため、やかんを持っていかずに、コッフェル大・中・小の３つを持っていった。またコッフェル掴みは不要と判断し、持っていかなかった。その結果、分離式のガスヘッドは、最初は使用に慣れないところもあったが、火力も問題なく使用できた。コッフェルでお茶、米、汁などすべてに対応出来たため、縦走で軽量化が必要な場合は、この計画で問題ないだろう。

＜登攀用具＞

雪上用ザイルは持っていかずに、コンティニュアスをする際はザイル８．５ｍｍ×５０ｍを使用することにした。スノーバーは人数分ではなく、カラビナ付きで３本のみ持っていった。クロモリ製ハーケンを２枚とアングル １ 本を持っていった。その結果、ブナ立尾根では１ピッチＦｉｘを張ったが、支点は木で取れたため、スノーバー、ハーケン、アングルは使用しなかった。

＜燃料＞

今回の縦走では、軽量化の為ラジウスを持っていかず、分離式のガスヘッドを持って行った。そのため燃料も灯油ではなくガス缶を使用した。計画は２００８年度の春山合宿を参考にした。行動日、行動予備日のガス使用量は１人１日８０ｇ、停滞日は１００ｇとし、予備１５％の計算でガス缶を持っていった。実際は全体の平均使用量は１日８５．７ｇであり内停滞が２日あったことを考慮すると、今回の縦走ではこの計画は適当であった。

＜その他＞

修理具箱の中身は不要な鉄製の自在、ラジウス部品を抜いた。また、裁縫用具とスペア靴紐は個人装備ではなく団体装備として追加した。シーバーは、基本的に隊を分けることはなく緊急時以外使用しないことを考慮して、予備電池は１セットずつ持っていった。緊急用に蛍光テープを１ロール持っていった。

＜個人装備＞

軍手は食当用として１つ団体装備として持っていくため個人装備では持っていかなかった。登攀具は個装カラビナ３つ、環付きカラビナ２つとし、アッセンダーは持って行かなかった。アッセンダーの代用品としてプルージックコードを持っていった。アイスハンマーは隊で２つ持っていくこととし、ハンマーホルスターは持っていかず、裁縫用具、スペア靴紐は修理具箱に入れるため、個人装備としては持っていかなかった。また着替えについては事前に下山先の宿泊施設に送った。

食糧

＜基本計画＞

２０１１年度春山合宿を参考にし、前期は１人１日行動日５２０ｇ、行動予備日４５０ｇ、停滞予備日４５０ｇ、後期は１人１日４５０ｇの計算で計画した。行動日の重量を５２０ｇとすることで摂取カロリーを増やし、その分予備日の重量を少なくした。

また今回は縦走だったため、パッキングがしやすく、ゴミを出さないために１日毎に食糧をまとめるといったことはしなかった。

＜メニュー＞

冬山合宿で鶏清湯の評判が悪かったため今回は入れず、代わりにとんこつ味噌鍋を取り入れた。同様に中華丼も食べにくいという意見が多かったため親子丼に変更した。またMはかさばらないすいとんとした。メニューは全体的に好評であった。

＜各袋＞

お茶嗜好品袋のミルクは１人１日１０ｇに減らした。嗜好品としてはココアを持っていき、冬山合宿で持っていった調味料袋の柚子胡椒等は除き基本的なものを中心とした。

＜フリーズドライ＞

冬山合宿のものに加えてモチを加工した。氷餅のようになったが戻りが悪く、あまりおいしくはなかった。今回は合宿中にフリーズドライのほぼすべてを使い切ることができた。

２０１５年度春山合宿　装備表

品名	数量	単位重量	総重量	合計	備考
～幕営用具～				8,445	
＜EXP6人用テント＞				7,065	
本体	1	3,220	3,300		
外張り	1	2,320	2,320		
ポール	1	1,445	1,445		予備ポール3本
＜EXP6人用テントペグ袋＞				1,380	
ペグ	30	25	750		プラペグ12本、竹18本
張り綱	3	50	150		
テント箒	1	50	50		
ガムテープ	1	110	110		
缶メタ	1	320	320		
～炊事用具～				6,615	
分離式ガスヘッド	2	440	880		
鍋敷	2	210	420		ベニヤ板
水ポリ	2	195	390		
テルモス	3	490	1,470		1ℓ
雪袋	2	90	180		雪取り用
＜コッフェルセット＞				2,710	大、中、小(メンツ14枚、底拭き入り
コッフェル大・中・小	1	1540	1,540		
メンツ	14	80	1,120		1人2枚 予備2枚
底拭き	1	50	50		
＜ブキ袋＞				565	
ブキ	7	30	210		予備1本
菜ばし	1	40	40		
しゃもじ	1	55	55		黒
おたま	1	65	65		プラ
こし布	1	30	30		
じょうご	1	25	25		
ゴム手袋	1	80	80		厚手
軍手	1	60	60		

品名	数量	単位重量	総重量	合計	備考
～登攀用具～				8,480	
ザイル8.5mm×50m	2	2,725	5,450		
アイスハンマー	2	680	1,360		
スノーバー	3	295	885		カラビナ付
＜スリング・登攀具袋＞				785	
テープ10mm×600mm	5	50	250		
カラビナ	10	30	300		
ハーケン	2	75	150		
アングル	1	85	85		
～燃料～				12,920	
ガスカートリッジ(大)	19	680	12,920		行動80g 停滞100g 予備１５%
～その他～				6,090	
ツェルト	2	530	1,060		3人用
修理具箱	1	985	985		温度計、電池、予備ガスヘッド
薬品箱（大）	1	810	810		
ラジオ(天気図用紙入り)	1	290	290		天気図用紙30枚入　予備電池1セット
デジタルカメラ	1	270	270		予備電池2個
トランシーバー	2	425	850		予備電池1セット
蛍光テープ	1	50	50		直径約5cm
デポ袋	3	265	795		ナイロン製3個
スノーソー	2	275	550		鞘付き
携帯電話（部）	1	240	240		非常時用
GPS	1	190	190		
合計総重量				42,550	
下山総重量				33,772	

２０１５年度春山合宿　食糧表

期間	日程	行程	B	L	D
1	3月4日	入山　～ブナ立尾根取り付き		L1　①	D1　①
2	3月5日	～ブナ立尾根2209m	B1　①	L2　①	D2　①
3	3月6日	～烏帽子小屋	B2　①	L3　①	D3　①
4	3月7日	～野口五郎小屋	B3　①	L1　②	D4　①
5	3月8日	行動予備日	B1　②	L2　②	MD1　①
6	3月9日	行動予備日	B2　②	L3　②	MD2
7	3月10日	～水晶小屋	B3　②	L1　③	D1　②
8	3月11日	～三俣山荘	B1　③	L2　③	D2　②
9	3月12日	行動予備日	B2　③	L3　③	MD3
10	3月13日	～硫黄乗越	B3　③	L1　④	D3　②
11	3月14日	槍ヶ岳山荘　槍ヶ岳アタック	B1　④	L2　④	D4　②
12	3月15日	行動予備日	B2　④	L3　④	MD4
13	3月16日	停滞予備日	B3　④	M	MD1　②
14	3月17日	～槍平	B1	L1	D1
15	3月18日	～新穂高温泉　下山	B2	L2	
16	3月19日	行動予備日	B3	L3	D2

成人の一日摂取カロリー2400kcalを目指す
テルモスは3個。
[基本計画]
砂糖1人1日40g
ミルク1人1日10g
全日程平均重量　　1人1日487g
全日程平均カロリー　1人1日1920kcal

前期
行動日　　1人1日520g　（B:140g　L:180g　D:200g）
行動予備　　1人1日450g　（B:140g　L:180g　MD:130g）
停滞予備　　1人1日430g　（B:140g　M:160g　MD:130g）
後期
行動日、行動予備日　　1人1日420g　（B:130g　L:160g　D:130g）

B1：とんこつ味噌鍋

品名	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
α 米	110	100	3.9	425.7	387.0
スープ素	5	5	2.4	11.8	11.8
乾燥肉	10	10	6.7	67.3	67.3
乾燥野菜	5	5	4.9	24.7	24.7
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
計	140	130	−	567.8	529.1

B2：ラーメンライス（後期　ラーメン）

品名	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
α 米	70		3.9	275.1	0.0
棒ラーメン	40	100	2.0	80.0	200.0
スープ素	5	5	1.0	5.0	5.0
乾燥野菜	8	8	4.9	39.4	39.4
乾燥肉	7	7	6.7	47.1	47.1
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
計	140	130	−	485.1	330.0

B3：海鮮雑炊

品名	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
α 米	110	100	3.9	425.7	387
スープ素	5	5	3.4	17.2	17.15
乾燥魚介類	8	8	6.7	53.8	53.84
乾燥野菜	2	2	4.9	9.9	9.86
乾燥卵	5	5	6.7	33.7	33.65
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
計	140	130	−	578.6	539.9

M：すいとん

品目	重量	カロリー	
	g	g当	計
小麦粉	120	3.4	408
スープ素	10	2.35	23.5
乾燥野菜	20	4.93	98.6
乾燥肉	20	6.73	134.6
砂糖	10	3.84	38.4
合計	180	−	703.1

L1：

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
ロールケーキ	100	80	4.4	440.0	352.0
グミ	40	40	4.0	160.0	160.0
サラミ	20	20	5.0	100.0	100.0
アメ・チョコ	10	10	4.7	47.0	47.0
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
合　計	180	160	−	785.4	697.4

L2：

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
バームクーヘン	100	80	3.2	430.0	256.0
煎餅	30	30	4.3	129.6	129.6
クッキー	20	20	5.0	100.0	100.0
アメ・チョコ	20	20	4.7	94.0	94.0
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
合　計	180	160	−	792.0	618.0

L3：

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	後		前	後
ドーナツ	100	80	4.5	450.0	360.0
グミ	40	40	4.0	160.0	160.0
チーズ	20	20	3.4	68.0	68.0
アメ・チョコ	10	10	4.7	47.0	47.0
砂糖	10	10	3.8	38.4	38.4
合　計	180	160	−	763.4	673.4

D1：シチュー

品目	重量			カロリー			
	g			g当	計		
	前	M	後		前	M	後
α 米	150	90	90	3.9	580.5	348.3	348.3
シチュールー	20	15	10	5.3	105.4	79.1	52.7
乾燥肉	5	3	5	6.7	33.7	20.2	33.7
乾燥野菜	5	2	5	4.9	24.7	9.9	24.7
砂糖	20	20	20	3.8	76.8	76.8	76.8
合　計	200	130	130	−	821.0	534.2	536.1

D2：キムチ鍋

品目	重量			カロリー			
	g			g当	計		
	前	M	後		前	M	後
α 米	150	90	90	3.9	580.5	348.3	348.3
キムチの素	7	5	5	2.1	14.7	10.5	10.5
乾燥肉	12	8	8	6.7	80.8	53.8	53.8
乾燥野菜	11	7	7	4.9	54.2	34.5	34.5
砂糖	20	20	20	3.8	76.8	76.8	76.8
合　計	200	130	130	−	807.0	524.0	524.0

D3：カレー

品名	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	150	90	3.9	580.5	348.3
カレールー	15	15	5.3	79.1	79.1
乾燥肉	8	3	6.7	53.8	20.2
乾燥野菜	7	2	4.9	34.5	9.9
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
計	200	130	−	824.7	534.2

D4：親子丼

品目	重量		カロリー		
	g		g当	計	
	前	M		前	M
α 米	150	90	3.9	585.0	351
スープ素	5	5	2.4	11.8	11.75
乾燥肉	5	5	6.7	33.7	33.65
乾燥野菜	5	5	4.9	24.7	24.65
乾燥卵	5	5	4.9	24.7	24.65
乾燥味噌汁	10	−	3.4	34.0	−
砂糖	20	20	3.8	76.8	76.8
合　計	200	130	−	790.5	522.5

１０．個人山行

期間	場所	メンバー
５月２３日～２４日	奥武蔵　北川	井上（２）関根（２）
５月３０日～３１日	奥武蔵　阿寺の岩場	井上（２）関根（２）中村（２）
６月５日～７日	奥秩父　小川山	淀川（ＯＢ）大山（３）井上（２） 関根（２）中村（２）
６月２７日～２８日	奥多摩　越沢バットレス	小林（ＯＢ）大山（３）中村（２）
７月１７日～１９日	御坂　三ツ峠	村田（ＯＢ）小野寺（４）大山（３） 井上（２）関根（２）小島（１） 志村（１）橋本（１）
７月２１日	丹沢　勘七ノ沢	西出（ＯＢ）小野寺（４）
９月１６日～２０日	北アルプス　剱岳	小野寺（４）中村（２）小島（１）
１０月１８日	丹沢　塔ノ岳	井上（２）関根（２）橋本（１）
１０月２２日	谷川連峰　谷川岳	西出（ＯＢ）岩附（４）
１０月２５日	丹沢　塔ノ岳	岩附（４）小島（１）志村（１）

１１．部員所感

海外遠征と共にあった４年間

４年　小野寺央峻

僕が所属していた農大山岳部の４年間は、常に海外遠征が身近にあった。入部して間もない時期から、２年後の海外遠征の計画を聞かされ、２年の後半から本格的に海外に行くことが決まり、３年時にはムスターグ・アタへの遠征に参加できた。そして、遠征が終わり、その次の遠征を目指すに当たり、４年生時から本格的に準備活動が始まっていた。長い山岳部の歴史でみると、ここまで恵まれていた年はなかったのではないだろうか。本当にこのチャンスをものにできたことは、運が良かったと感じる。

だが、海外遠征が全てにおいて良いものであるとは、思わない。それは、僕らが学生で行ったがために、後輩にも迷惑をかけたことだ。そればかりは仕方のないことであるが、言い換えれば、僕らが、運が良かった分の不運とも受け取れる。これは後輩目線から言えば、非常に失礼な言葉かも知れない。だが、現実として存在した以上、目を背けてはいけない。

なぜなら、僕らの運は天運ではないはずだからだ。あくまで、僕個人の場合ではあるが、僕が入部した時に海外遠征の話しが既に盛り上がっていた。そのため、そこに乗っかるような形で、僕はムスターグ・アタに行くことができた。たらればの話だが、僕はそこに行くことができたからこそ、今後も山を登り続けたいと思い、次のステージを目指したくもなった。これは人が人を動かしてできた人為的な機会である以上、天のめぐり合わせではないはずだ。だからこそ、今後僕がやらなければいけない事は、後輩のために、僕が得たような機会を作ることだ。それは決して海外遠征だけではない。国内の遠い場所の遠征でもいいし、クライミングだっていい。ただ、後輩の世界を広げる活動かつ、人生の彩る目標にめぐり合わせるチャンスを作れればいい。エゴイズムな贖罪行為かもしれないし、後輩の中ではそれを面倒に思う者もいるかもしれない。だが、今後は学生で海外、もしくはそれに匹敵する目標を持たせ、実践させることが必要なのではないか。

そして僕の願いになるが、後輩たちには海外の高峰を目指すスタイルを踏襲して欲しい。僕が３年の時に見た、あの群青の空を実際に見てほしい。未知の場所に行って欲しい。それらは確実に人間力を高めてくれるはずだから。

東京農業大学農友会山岳部

４年　岩附正樹

私は４年間の山岳部生活の中で非常に多くのことを教えてもらいました。もちろん辛いこともたくさんありましたが、夏山縦走中の昼寝の気持ち良さや極寒の雪山での登攀の恐怖感、ナイフリッジを通過するときの緊張感など登山の面白さをトコトン学ぶことができま

した。なかでも重い荷物を背負って何日もかけて山頂を目指し、苦しい思いをして登頂したときの「達成感」は本当に素晴らしいものでした。また山にいる時だけではなく、下山後のお風呂の気持ち良さや、布団で眠ることの幸せなど日常生活で忘れがちな生活の豊かさも再認識することができました。ただやはりなんといっても農大山岳部で一番学んだことは「仲間を大切にする山登り」と「気心の知れた仲間との登山の面白さ」です。自分１人では登れない山も仲間と一緒になら登ることができることを知りました。もちろん、そのためには自分のことだけではなく常に仲間のことを意識して登らなくてはいけませんが、仲間と同じ経験を共有することは非常に素晴らしいことであると強く感じました。また常に合宿で寝食を共にしてきた部員との登山は、お互いを信頼することができるため、他の人と登山するよりも格段に面白いということも知りました。私はこの２つのことを OB になってやっと気づくことができました。実際に１年生の頃は、部活が辛くて退部することばかりを考えており、こんなことを思うとは想像もしていませんでした。しかし、４年間続けたことによって、農大山岳部の素晴らしさを少しですが理解することができました。これから山岳部で活動する後輩には山登りの楽しさだけではなく、仲間と登山することの素晴らしさを学生時代の内になるべく早く気づいてもらいたいです。

最後になりますが、私が４年間無事に活動を続けることができたもの両親をはじめ、監督、コーチを含めたＯＢ・ＯＧの先輩方のおかげであると強く感謝しております。私にとっての４年間はとても短いものでしたが、支えて下さった方からすれば非常に長い時間であったと思います。本当に長い間ありがとうございました。また、今後は学生を支える立場として尽力していきたいと思いますので今後とも御指導、御鞭撻の程宜しく御願い致します。そして、最後に４年間ともに切磋琢磨してきた小野寺へは「ありがとう」の感謝の言葉とマナスル遠征に向けて「頑張っていこうぜー！」の奮闘の言葉を贈りたいと思います。

山は（も？）自己満足

２年　井上峻太郎

この１年、前半はまあまあ調子が良かったが秋頃に足を痛めてしまい、合宿において満足のいく登山ができなかった。差し当たり合宿に参加することに支障はないのだが、事前に十分なトレーニングをした上で臨めないのが歯痒かった。特に春山は、トレーニングも万全でないし、その他諸々あって出発前から不安が積もる。槍ヶ岳直下で悪天候にはまったときは、久しぶりに１年の時の夏山を思い出した。

山は、他人と勝ち負けを争う競技と違うのだから、より一層自分が納得できるように登らなければダメだなと今年度はつくづく実感した。アルパインだと自分が成長しているという成果が具体的な数字で見えない以上、やっぱり自己満足の要素、自分の内側から湧き上がってくるものがないとやる気が出ない。もちろん前提として、山岳部に所属している以上はチームとしてやらなければならないこと、ある程度の制約はある。でも、チームの力を最大限に引き出すためには、個人が主体性を持って心からやりたいと思うことをやっ

ていかないと全体のモチベーションが保てないだろう。

今後も山岳部中心の生活になるのだから、あと２年間後悔のないように登っていきたい。自分も後輩も計画や行くまでの体調管理を含めて一つ一つの合宿を行って良かったと納得できればなと思う。やれることは少しずつやっていきたい。

所感

２年　関根孝高

昨年は１人も欠ける事なく、１年目としてとてもいい環境で登山が出来た。今年は初めての上級生で去年の山岳部とは、また一味違う１年だった。

新１年生が４人も入部して賑やかな始まりで、人数が多く大変な事も沢山あったが、皆が競い合いながらいい雰囲気で活動できとても楽しかった。しかし、新歓で１人、夏山に１人、秋山で１人、春山強化で橋本が休部と、この１年で４人も抜けてしまった。そして新年度に入って４年生と自分が抜けて現役部員が３人になった。追い打ちで中村が退部した。１年足らずで１０人から３人になるという激動の年だった。

上級生として過ごした１年だったが、こうして振り返ってみると自分は上級生として登山技術はもちろん、気遣いも出来ないし、４年生に頼って甘えていた所が多かったと思う。自分も編入という選択肢があったが、勉強は無理と諦め卒業してしまった。卒業もギリギリだったが、今の山岳部のギリギリ加減を見ると今更後悔してしまう。今年は光栄なことにマナスル遠征に参加させて頂ける事になり、合宿に参加したり、部室を訪れる機会もあるので、去年を反省して出来るだけ山岳部を盛り上げていきたい。

井上にはリーダーとして、残り２年間充実した良い大学生活を送ってもらいたい。２年間ありがとうございました！！

最高な山登り

１年　小島明

大学に入って何かしたい、変わりたいと思い、山岳部に入って、ここまでやってきました。１年経ってみて思うのは一つ一つの合宿はつらく厳しかったはずなのに、今思えばなにかしら楽しい思い出が浮かびます。新歓は駆け下るのが楽しかった。岩登りは始めてクライミングをして自分でもこんなところに行けるんだと思い、楽しかったし、六月は初めての北アルプス涸沢の見渡す限り山のスケールに驚き、楽しかった。夏山は序盤早々にしてリタイア、悔しかったし皆と行きたかった。でもハシゴ谷を越える際の全力で登り、登り切った時は全力を出し切った感じがよかった。そして秋山は縦走で進んだ道とこれから行く行程を見て、楽しかった。そして一緒に登ってくれた志村と橋本。２人がいたから頑張れたし、すごく楽しかった。積雪期に入り、耐寒は最初の目標だった富士山、夏とはまた違う顔を見せる富士山、頂上を目指し、登っていくのは最高に楽しかった。冬山は皆でラッセルし、つけたトレース。自分はほんのちょっぴりしか貢献できていなかったかもし

れないけど皆で登っている感じがして、楽しかった。春山強化はすごく寒かったけど登攀を終え、稜線を歩いている時の青い空、すごく綺麗で続けてきてよかったと思った。春山は一年の集大成、これまでやってきた事をぶつけて、全力で登った。自分の成長を感じ、さらに上級生方のサポートのありがたさを知りました。皆さんがサポートしてくれたおかげで自分は全力で山に登れたと思います。ありがとうございました。そして、春山を終えた後、自分も次の子たちが全力で楽しく登れるように連れて行ってやりたいと強く思いました。

最後に山岳部に入って何かが変わると思っていた自分へ、「まだまだ未熟、毎日が精進、行けるところまで行こう」

所感

1年　橋本允聖

山岳部に入って、冬山合宿までの間でしたが、その間はとても充実したものでした。新歓合宿では新歓なのにこんなにしんどいのかと思い、登山の辛さを初めて知りました。正直合宿は辛いものばかりでしたが、なんとかついて行くことができました。合宿が終わるとすぐに次の合宿といった感じで、あっと言う間に冬山まで終わってしまいました。ただ大学に入って普通に過ごしているだけでは、この経験したようなことはできなかったと思うので山岳部に入って良かったと思います。本当は山岳部を続けていく予定でしたが、現在は個人的な事情で休部させてもらっています。なるべく早く復帰できるようにしたいと思っています。また、休部という形で山岳部を続けさせていただいていることに感謝しています。復帰した後、合宿に行ける回数は少ないと思いますが、残された合宿を精一杯頑張りたいです。